

平成31年度

布教
羅針盤

ふきよう
らしんばん

所求・所帰・去行

所帰——阿弥陀仏を
信じて◎1

浄土宗

平成三十一年度 布教羅針盤

所求・所帰・去行

所帰——阿弥陀仏を信じて 1

はしがき

今年もまた、『布教羅針盤』をお届けすることになりました。平成二十九年度から新元号六年までの間、つまり、宗祖法然上人浄土宗開宗八百五十年までのテーマとして「凡入報土（救われていく道）」を掲げてまいります。

ここで浄土宗の理想とする教師像、つまり寺院にて、社会にて、人々の集うさまざまな場所で、さまざまな機会に「法然上人の立教開宗の心」を伝える僧侶となつてもらいたいということをお伝えしたいのです。

浄土宗教師の意識改革、資質向上を目指してまいりましたが、意識改革とは何ぞや？ 資質向上とはどういった資質を持てばよいのか？ といった声を聴くことがあります。

理想としては、宗祖法然上人の教えを理解し、それを間違ひなく檀信徒、さらには世間の人々にお伝えすること、つまり「自信教人信」なのであります。

今さら何を言うのだとお思いでしょうが、果たして自身を振り返つてみていかがでしょうか？ 口で言うのは容易いですが、実践となるとどうでしょうか？ 浄土宗のすべての教え、つまり法然上人が立教開宗されたのち、当時の京の都で布教されたことすべて

を理解しているでしょうか？ 小衲自身、とても自信が持てません。

ではどうすれば良いのでしょうか。講習会等で日本全国にうかがっておりますが、そのとき申しあげている理想の教師像はただひとつ、それは寺院住職として、檀信徒の皆さんに親しみを持ってもらえる僧侶、信頼されている僧侶、もっと有り体に言えば、檀信徒の皆さんと同じ立ち位置で話ができる、言葉が通じる僧侶であるべき、ということなのです。

もちろん、学問ができるに越したことはありませんし、高邁な精神、心を持っていることは大切であります。

しかし、そういった自覚を持つているだけで良いのでしょうか。身につけた学問を自慢したり、俗に言う「上から目線」になつていないでしょうか？

法を説くことは大事ですし、僧侶として必要なことでしょう。しかしそれはあくまでも宗祖法然上人の心を心としていなければならないわけであります。

毎度申しておりますが、勢至丸という天才児が、ときの仏教の最高の教えがあるという比叡山で、「智慧第二」と誉れ高い評価を得たことに満足せず、「なげきなげき経蔵にいら、かなしみかなしみ聖教にむかいて」二十五年求め続け、ついに辿り着いた浄土の教えであります。

そして京の町に居を構え、多くの信者に教えを説かれてなお充分とせず、「我、聖教を見ざる日なし」と努力を続けられた法然上人、その法然上人を宗祖と仰ぐ我々浄土宗徒であります。一步でも、いや半歩でも宗祖に近づく努力をし、そして結果を誇らず「一文不知の愚鈍の身」を自覚し法を説く心を持つことが大切なのであります。

今、私も浄土宗には七十余カ寺、一万余の僧侶、そして寺族の皆さん、さらにはその先に、全国五百万人という檀信徒の皆さんがおられます。

一万余の浄土宗僧侶が心がけねばならないことは何か？

先述しましたように、僧侶はそれなりに修行をし、そして戒を授かり宗祖の教えを説くことができます。その説き方を一考していただきたいということなのであります。

当然浄土宗教師として、「浄土宗二十一世紀劈頭宣言」をご了知されていることと思いますが、何よりも「愚者の自覚」を持たなければなりません。

宗祖法然上人が、求め続けた結果辿り着かれた浄土の教え、すべてを感得した天才僧と名を轟かせてもなお「一戒をも保たず」と述べておられるわけです。

「宗祖の心を心として」と常々申しておりますが、この心こそが、浄土宗の僧侶の持つべき心なのです。

本年四月一日より、浄土宗宗務庁の機構が変わります。大幅な改革なので、宗務庁職

員もその対応に追われておりますが、目的はただひとつ。七千余カ寺から納めていただいた一宗課金を、一円たりとも無駄にしないということ、それでいて宗務サービスの低下を招かないということです。

宗門の使命である教学振興、教線拡大を、全職員一致して取り組める組織となります。宗務庁の命令系統の単純化によるスピードアップ等、考えられることをすべて盛り込んだ改革です。

さらに、昭和四十九年の開宗八百年当時スタートした教化センターについては発展的に解消し、教化の重要性を意識した組織となる予定です。

宗門各位のご協力をいただいて進めてまいる所存であります。
ご理解のほど、お願いいたします。

合掌

平成三十一年四月

浄土宗宗務総長 豊岡 録尔

テーマ 「凡入報土（救われていく道）」

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。

（『法然上人行状絵図』六）

私が浄土宗を立てた意趣は、凡夫が阿弥陀仏の報土に往生できることを示すためである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』より）

法然上人のこのお言葉（心）が、我（法然上人）から我々（全浄土宗教師）に与えられたと認識したとき、全浄土宗教師の行動理念たるものと考えます。すなわち、「示さむ」という意志に基づく自行化他の行動、教化活動こそが浄土宗教師のつとめでありましょう。

平成三十六年に浄土宗開宗八五〇年を迎えます。本宗の布教方針は、約八百五十年前に法然上人が専修念仏の法を確信し、やがて世に布教されたように、開宗の教えである「ただひたすらに称名念仏を修する専修念仏」を伝えることにあり、その行動指針は「凡夫の報土に生まるることを示す」ことに尽き、法然上人のご法語を通じ、救われていく道を布教することにあります。

この布教方針は、『二十一世紀劈頭宣言』（愚者の自覚を・家庭にみ仏の光を・社会に慈しみを・世界に共生を）^{ともいき}に活かされているとおります。

浄土宗の理想とする教師像は、寺院にて、社会にて、人々の集うところで、さまざまな所で、さまざまな機会に、「立教開宗のこころ」を伝える人であります。

◎目次◎

はしがき	浄土宗宗務総長 豊岡鐔尔	2
布教方針		6

教諭	浄土門主 伊藤唯眞 猊下	11
----	--------------	----

第1章 所帰——阿弥陀仏を信じて

浄土宗における阿弥陀仏の捉え方	大正大学教授 曾根宣雄	16
-----------------	-------------	----

第2章 宗祖のご法語をいただいて

一、阿弥陀さまとわたし

..... 青森教区弘南組 遍照寺 花田俊岳 66

二、生ききる―この人生をいかに生き、全うするか

..... 新潟教区新潟組 長善寺 炭屋昌彦 78

三、今ある、ありがとう

..... 伊勢教区香肌組 蓮浄寺 堤康雄 93

四、阿弥陀如来の本願と法然上人の浄土開宗

..... 岡山教区美作組 浄土院 漆間宣隆 107

凡 例

典拠を示すにあたっては次の略号を用いた。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

- 聖典……『浄土宗聖典』（浄土宗）
- 昭法全…『昭和新修法然上人全集』（平楽寺書店）
- 浄全……『浄土宗全書』（山喜房仏書林）
- 御法語…『平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇』（知恩院）

なお引用文は、漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかにあらためたほか、適宜ルビを付した。

教 諭

私たちの浄土宗は、五年後に開宗八百五十年の記念すべき時を迎えます。

開宗にあたって宗祖法然上人は、

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。

と、愚かな私たちでも極楽浄土に往き生まれることが出来るという教えを弘めるために浄土宗の立教を宣言されました。

それまでの我が国の佛教は、自らの修行によって佛となる教えであり、争乱や天災地変や飢饉の続く世の中で、苦しみから逃れ、すべての人が等しく救われていく道は閉ざされていました。法然上人ご自身も、また愚者の身であるとされ、万人が救われる教えを求め、やがて阿弥陀佛の本願により往生する浄土門の教えにお出会いになりました。

阿弥陀佛はすべての人を救わんとして誓願を立てられ、その願を成就されて西方極楽浄土の佛国をお建てになりました。その国は、この世において佛となることのできない私たち、なんの煩いもなく阿弥陀佛の教えを聞き佛道修行が出来、やがて佛となっていく処であります。更に阿弥陀佛は平生に慈悲の光りをもって私たちを照らして下され、命の尽きる時には、御自ら私たちを迎えとって下さるみ佛でもあります。

法然上人は、「受け難い人間として生を受け、遇い難い本願にめぐり合い、起こし難い求

道の心を起こして、離れ難い輪廻の境涯を離れ、生まれ難い浄土に往生することは悦びの中の悦びである」とされ、阿弥陀佛の本願に遇うことを天に仰ぎ地に伏して悦びなさいと仰せになっておられます。

開宗八百五十年を迎えるにあたり、浄土宗では「お念佛からはじまる幸せ」を提唱しております。しあわせは、めぐり合わせの意味でもあります。

私たちや先人の方々が、どのような縁によって阿弥陀佛のお救いと法然上人のみ教えにめぐり遇うことが出来たかを思い巡らし、深い帰依の心をもって称名念佛の日暮らしを続けてまいりましょう。

合 掌

平成三十一年一月一日

浄土門主 願譽唯眞

◎
第1章
◎

所帰

——
阿弥陀仏を信じて

浄土宗における阿弥陀仏の捉え方

大正大学教授 曾根 宣雄

1 はじめに

法然上人の『黒田の聖人へ遣わす御文（一紙小消息）』の中には、

十方に浄土多けれども、西方を願うは十惡五逆の衆生も生まるる故なり。諸仏の中に弥陀に歸したてまつるは、三念五念に至るまでみずから來たりて迎えたまうが故なり。諸行の中に念仏を用いるは、かの仏の本願なるが故なり。⁽¹⁾

とあります。これは「所求（求める所）^{しよぐ}」^{ぎよう} 〓 極樂浄土、所歸（歸する対象）^{しよき} 〓 阿弥陀仏、去行（往生行）^{ぎよう} 〓 選択本願念仏」ということを示したものです。この教えは『無量寿經』『觀無量寿經』『阿弥陀經』の「浄土三部經」に説かれる内容を、法然上人が善導大師の教えに

基づき解釈し示されたものです。私たちは、浄土宗の教えの根拠が「浄土三部経」にあり、それを理解するにあたっては、法然上人の解釈に基づくということを改めて確認する必要があります。

平成二十九年度『布教羅針盤』の「所求―極楽往生を目指して」においては、現在上座部の僧侶によってなされている「大乘仏教や浄土教は仏教ではない」という批判の実例をあげた上で、「浄土三部経」の価値や位置づけをきちんと最認識すべきであることを述べました。それは、浄土宗内においても、そういった批判に同調した発言をしている方がいるからに他なりません。

その際に、佛教大学教授の本庄良文先生による「阿毘達磨^{あびだま}仏説論と大乘仏説論²」及び「経の文言と宗義―部派佛教から『選択集』³へ」を紹介させていただきましたが、その中で、本庄先生は部派仏教の仏説論が大乘仏教興起の理論的基盤を提供したと結論づけられています。私たちが大乘經典を仏説とみなすのは、後の修行者が三昧の境地や仏智の境界に入り、そこで仏（釈尊）に出会い、仏の教えを聞き、それを經典としてまとめたものであるからです。したがって、「浄土三部経」に説かれる阿弥陀仏及び極楽浄土の教えは、架空のものなどではなく、仏智の境界から示されたものであり、仏説といえるのです。

また、佐伯真光氏は「明治仏教百年の錯誤——根本仏教神話を非神話化しよう」という論攷の中で次のように述べています。

明治以後今日まで、日本の仏教界には一つの神話がおこなわれてきた。それは仏教が本来合理的、理性的、科学的な宗教であり、かつてインドには純粹で明瞭な原始仏教なるものが実在したという神話である。姉崎正治はこのような理想的な仏教を〈根本仏教〉と名づけた。この神話を信ずる立場からみれば、仏教史は仏教墮落の歴史にほかならぬことになる。——中略——この図式を信ずるかぎり、日本の仏教各宗派はいかに弁明しようとも、結局は本来の仏教から見れば異質的なものであり、墮落した一形態にすぎぬことになる。⁽⁴⁾

そして日本仏教の祖師については、

明治になって西洋の学問に接するまで、日本の仏教徒は根本仏教という言葉も原始仏教という言葉も知らなかった。仏教が合理的宗教か非合理的宗教かという問題のたて方が

なされたこともなかった。しかもすぐれた仏教者は自主的に仏教者として行動していたのである。最澄、空海、法然、栄西、親鸞、道元、日蓮はパーリ語を知らなかった。しかも彼らはパーリ語文献に通じた現代の学者よりもはるかに立派な仏教徒だったのである。⁽⁵⁾

と述べています。些か前の論攷ではありますが、佐伯氏の一連の指摘に対して私たちは謙虚に耳を傾ける必要があるでしょう。なぜならば、根本仏教第一主義に立つならば、日本仏教の祖師はすべて仏教を墮落させた人々に他ならないからです。私たちは、法然上人の經典解釈こそが真の仏教であり、完成された教えであることを忘れてはならないのです。本論は、そういったスタンスで記していきたいと思っています。

2 阿弥陀仏の仏格は報身^{ほうしん}(6)

浄土宗における極楽浄土及び阿弥陀仏の捉え方について法然上人は、『逆修説法』六七日

において、

娑婆の外に極楽あり、我が身の外に阿弥陀仏ましますと説きて、此の界を厭い、彼の国に生じて無生忍を得んとの旨を明かすなり。⁽⁷⁾

と述べています。娑婆は穢土であり、私たちは罪惡生死の凡夫であり、「己身の弥陀」という受け止め方を明確に否定しています。法然浄土教においては、所求である極楽浄土はあくまでも指方立相であり、所帰としての阿弥陀仏は自己に内在するのではなく、浄土を構えられてゐる救済者なのです。したがって、私たちの心の中に浄土や阿弥陀仏を築いたり生起させるという考え方は、浄土宗の教えとは異なります。そもそも、私たちの心が浄土や阿弥陀仏とイコールになるのであれば、それはさとりにも他なりません。

浄土宗では、阿弥陀仏及び極楽浄土を報身報土と定義します。純粹浄土教祖師の中で、このことを最初に提示したのは、道綽禪師です。道綽禪師は『安樂集』において、

問うて曰く。今現在の阿弥陀仏は是れ何の身ぞ。極楽の国は是れ何の土ぞ。答えて曰く。

現在の弥陀は是れ報仏、極樂宝莊嚴国は是れ報土なり。然るに古旧相伝えて皆云う、阿弥陀仏は是れ化身、土も亦是れ化土なりと。此れを大なる失と為す。若し爾らば穢土もまた化身の所居なり。浄土もまた化身の所居ならば未審し、如来の報身は更に何れの土に依るや。今大乘同性經に依りて報化浄穢を弁定せば、彼の經に云わく浄土の中に成仏するは悉く是れ報身なり。穢土の中に成仏するは悉く是れ化身なり。⁽⁸⁾

と述べています。道綽禪師は阿弥陀仏の仏身仏土についての問いをなし、阿弥陀仏は報身であり、極樂宝莊嚴国は報土であるとしています。その理由としては「穢土中成仏は化身であり、浄土中成仏は報身である」という『大乘同性經』の論をあげています。善導大師は『觀經疏』において、

問うて曰く、弥陀浄国は、はたこれ報なりや、これ化なりや。答えて曰く、これ報にして化に非ず。云何が知ることを得たる。『大乘同性經』に説くがごとし。「西方安樂阿弥陀仏は、これ報仏報土なり」と。また『無量寿經』に云く、「法藏比丘、世饒王仏の所^{せにようおうぶつ みむと}に在^いつて、菩薩の道を行じたまひし時、四十八願を發し、一一に願じて言^{いわ}く、もし我れ

仏を得たらんに、十方の衆生、我が名号を称して我が国に生ぜんと願じて、下十念に至るまで、もし生ぜずんば、正覚を取らじ」と。今すでに成仏したまう、すなわちこれ酬因の身なり。⁽⁹⁾

と述べています。阿弥陀仏及び極樂浄土を報身報土であるとし、四十八願を建てその願を成就したことをもって「酬因の身」であるとしています。阿弥陀仏が報身である理由としては、願行に酬いた仏であることをあげている点が注目されます。こういった論を受けた法然上人は『無量寿経釈』において、

報身とは、前の因に報いて感得するところの身なり。——中略——凡そ万行の因に答えて万徳の果を感ずること、依因感果、華の果を結ぶが如し。業に酬^{むく}いて報を招く、響の声に随うに似たり。これ則ち法蔵比丘実修の万行に酬いて、弥陀如来は実証の万徳を得たまえる報身如来なり。⁽¹⁰⁾

と説かれています。報身とは、万行の因に報いて感得する身であるとした上で、法蔵比丘が

実修の万行に報いて、実証の万徳を得たのが阿弥陀仏であり、報身如来であるとしています。このように善導大師と法然上人は、阿弥陀仏が願行成就（身）であることを根拠に阿弥陀仏の仏格を報身と定義しているのです。

ここで、法身・報身・応身の三身論について簡単に整理しておきます。「法身」とは、真如（真理）そのもののことです。空間的には普遍であり、時間的には不変です。ただし、色や形はありませんから、凡夫にとっては不可知・不可視・不可言説な仏身です。「報身」とは、願行成就によって仏となった仏身のことです。また、報身とは真理をさとした仏であり身口意の三業を有する人格身であり、凡夫に捉えることのできる仏身であると同時に普遍的かつ不変的な仏身です。「応身」とは、衆生の機根に応じて現れる仏身です。人格身ですが、一方で物理的な生と死との法則に従う存在であり、不変性や普遍性は有しません。

普遍・不変		人格
● 法身	○	×
● 報身	○	○
● 応身	×	○
	— 無始無終 —	— 無相 —
	— 有始無終 —	— 不可知・不可視・不可言説 —
	— 有相 —	— 可知・可視・可言説 —
	— 有始有終 —	— 有相 —
		— 可知・可視・可言説 —

このように報身は普遍性・不変性を有し人格身である点、凡夫に捉えることが可能である有相である故に、救済者にふさわしい仏身ということができます。報身という仏身を考える上で重要なことは、凡夫を超越した仏でありながら、凡夫に認識しうる仏であるということです。

3 私たち凡夫のありさま

なぜ私たちにとっては、報身の阿弥陀仏が必要なのでしょう。大乗仏教では「一切衆生悉有仏性」ということを説き、すべての衆生がさとの可能性を有することが説かれています。これは仏教の本質的立場を示すものです。一方、法然上人は『阿弥陀経釈』において、

真如実相、顕現するに由なし。

と述べ仏性が顕現しないという現実を告白されています。これは仏教における実存的（現実存在的）立場を示すものです。⁽¹²⁾ 法然上人が、現実を見据え本音で語っておられることは、浄土宗の教義の出発点として重要な意味を持つものであります。『念仏往生要義抄』においては、

念念歩歩に思いと思う事は三途八難さんずはちなんの業、寐ねても寤さめても案じと案ずる事は六趣四生ろくしゅししやうの絆きずなり。——中略——悲しきかなや、善心は年年としとしに随いて薄くなり、悪心は日日に随いていよいよ増まさる。されば古人のいえる事あり「煩惱は身に添える影、去らんとすれども去らず。菩提は水に浮かべる月、取らんとすれども取られず」⁽¹³⁾と。

と述べられ、煩惱を身に添う影に喩え、取り除くことが出来ないことを示し、菩提（さとり）を水に浮かんだ月に喩え、捉えることができないことを明らかにしています。末法の凡夫とさとりについては、『往生大要鈔』において、

末法のこのごろをや、下根の我らをや。たとい即身頓証の理を觀ずとも、真言の入我我にゅうがが入阿字本不生にゅうあじほんぶしょうの觀、天台の三觀六即中道實相の觀、華嚴宗の法界唯心の觀、仏心宗の即心是仏の觀、理は深く解げは浅し。かるが故に末代の行者その証しょうを得るに極めて難し。⁽¹⁴⁾

と述べています。末法の世に生きる私たち凡夫の機根が劣っているので「阿字本不生の觀・中道實相の觀・法界唯心の觀・即心是仏の觀」は、いずれも理は深いといえども解することができず、証を得ることが極めて難しいとしています。これらの觀は、いずれも執着を離れ無相の境界に入ることが目指すものであるといえますが、凡夫は執着を離れられず、無相の境界に入ることができないのです。したがって、私たち末法の凡夫は、娑婆において「無執着・無相」の境界に入れない（捉えられない）という課題を背負っていることを忘れてはなりません。そして、その課題を処理してくださるのが報身の阿弥陀仏なのです。

4 報身の論理構造——内証、如来Ⅱ外用

前述したように法然上人は『逆修説法』において、「己心の弥陀」を否定しています。このことは、私たち凡夫が娑婆においてさとれないことを意味していますが、さとれないということは法身（真如）を捉えることができないことを示すものです。仏教学の大家である山口益氏は、「如来について——特に報身の意味に関して」⁽¹⁵⁾という論文の中で、如来^{によ}について次のように整理されています。

如去—tathāgata→tathā+gata………真実の世界に到達した者・真実の世界に去った者
如来—tathāgata→tathā+āgata………真実の世界より来生した者

つまり、如去から如来への展開は、仏の体得せられた智慧（無分別智・勝義諦）が、衆生済度の慈悲（無分別後智・世俗諦）として救済作用を示すものに他ならないのです。そしてこの展開は、「仏方便（仏が凡夫に近づく）」といわれますが、それは不可言説・無相の境界

を凡夫が捉えられるように可言説化・有相化することなのです。

そういった点から、山口氏は報身・受用身について次のように述べています。

まことに、報身・受用身とは、正覺の智慧が大悲の説法となつて展開せんとする、すなわち、仏陀が如来となつて展開し、説法をもつて、一切衆生を救済せずにはおかまいという智慧の意志・約束・本願である。それは、一切の自己矛盾をあえておかしても、そうせずにはおれなかつた仏陀の苦惱そのものであり、仏陀が如来になつたということの深い意味が、この報身・受用身といういい方の上に見られるのである。⁽¹⁶⁾

ここでは、智慧（無分別智・勝義諦）が、衆生済度の慈悲（無分別後智・世俗諦）として展開する根拠に仏の智慧の意志及び本願があることを指摘しています。すなわち報身とは、凡夫に把握し得ない不可知・不可言説の智慧の境界を、可知・可言説という形式によって凡夫に提示する仏身ということができます。したがって、報身としての阿弥陀仏は、真如をさとした後にその境界を衆生に捉えられるように光明・説法・随形好等を具足し、三業を有した人格身として凡夫を済度するのです。

山口氏は、如去と如来という語を用いて報身を説明されていますが、こういった捉え方は法然上人の教えの中にも見られます。法然上人は、『選択集』の第三章に勝劣の義として、

初めに勝劣とは念仏は勝、余行はこれ劣なり。所以は何んとなれば、名号はこれ万徳の歸する所なり。然ればすなわち弥陀一仏の所有あらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用げゆうの功德、皆ことごとく阿弥陀仏の名号の中に攝在しやうざいせり。故に名号の功德最も勝とす。余行は然らず、各一隅おのおのを守る。これを以て劣とす。⁽¹⁷⁾

と述べられています。念仏が「勝」であるのは、阿弥陀仏の内証の功德と外用の功德が納められているからです。⁽¹⁸⁾法然上人は「四智・三身・十力・四無畏等」を内証の功德とし、「相好・光明・説法・利生等」を外用の功德としています。『選択集』に説かれている内容は、

内証（内なるさとり）——四智・三身・十力・四無畏等
外用（救済の働き）——相好・光明・説法・利生等

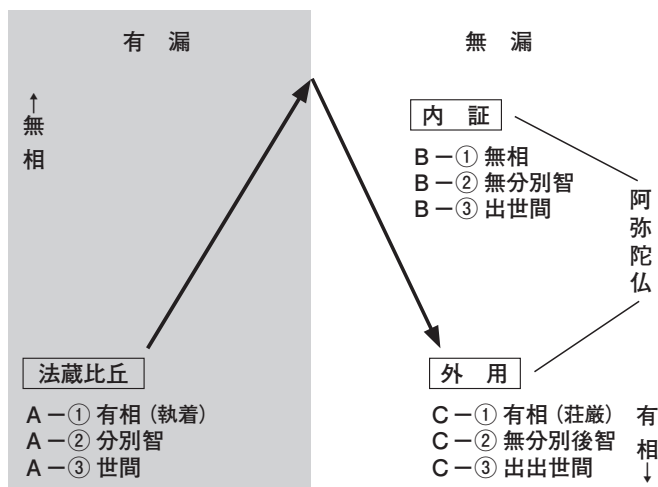
ということになります。すなわち「如去Ⅱ内証、如来Ⅱ外用」と捉えることが可能です。ただし、法然上人の名号論には大きな特徴があります。通常凡夫にとって「如去Ⅱ内証」の功德は、捉えようのないものである。「如来Ⅱ外用」の功德が示されるのですが、「南無阿弥陀仏」の名号には内証外用の功德が含まれるのです。したがって、私たちはお念仏をおとなえすることによって、本来は凡夫に知り得ない内証の功德まで享受することができるようです。（前回と重複しますが、大切なことですのでこの論理構造について記します）

阿弥陀仏の功德成就は「法蔵比丘↓内証↓外用」という順序によって理解することが出来ます。この流れは、以下のように置き換えて考えることも可能です。（前述した如去と如来は、如去Ⅱ内証・如来Ⅱ外用となります）

A		
法蔵比丘		
B		
内証（如去）		
① 有相（執着）	無相	
② 分別智	無分別智	
③ 世間	出世間	
C		
外用（如来）		
	有相（莊嚴）	
	無分別後智	
	出出世間	

①は「有相」執着の境界にあった法蔵比丘が「無相」の境界に入り、その後衆生救済のために四十八願を成就し「有相莊嚴」を顕すことを示すものです。②は「分別智」の世界にあった法蔵比丘が「無分別智」の境界に入り、その後衆生救済のために「無分別後智」を出すことを示しています。③は、「世間」にある法蔵比丘が、「出世間」の境界に入り、その後衆生救済のために出世間の境界からさらに出るので「出世間」であることを示しています。⁽¹⁹⁾

このうちAは有漏であるのに対して、BとCはいずれも無漏です。すなわちAからBへの展開は「有相（執着）・分別智・世間」等の有漏の迷いの世界から、Bの「無相・無分別智・出



世間」という仏智の境界に入ること示すもののなのです。それが「有相（執着）↓無相」「分別智↓無分別智」「世間↓出世間」ということで、**A**から**B**への展開自体は、有漏から無漏への転換ということができるのです。したがって、**B**は執着・差別を超えた無執着・無差別の境界です。

Bの境界は無相かつ無念無想にして不可言説ですから、能所の関係は成立しません。その意味において凡夫（衆生）には到底捉えることができないものであり、そこで阿弥陀仏は、衆生済度のために**B**から**C**へ展開します。「無相」である仏智の境界を凡夫に知らしめるために仏方便として「有相莊嚴」を出すのであり、「無相↓有相（莊嚴）」という展開は「無分別智↓無分別後智」「出世間↓出出世間」という展開でもあるのです。その意味において四十八願は、凡夫を済度するために立てられたものであることは当然ですが、無相である仏のさとり境界を凡夫が能所の関係で捉えられるようにするために建立されたものともいえます。そして、その四十八願の成就によって初めて可言説であり、凡夫に把握できる極楽浄土及び阿弥陀仏が出現したのであり、済度の場としての極楽浄土、救済者としての阿弥陀仏が実現したのです。すなわち**C**において顕された「有相（莊嚴）」は、仏のさとりの内容を踏まえた有相ですから、有漏の境界**A**の有相とは質的に異なる「勝義の有相」です。

このように、純粹淨土教の祖師たちは、無相・不可言説の境界に入ることのできない凡夫のために、阿弥陀仏が凡夫に捉えることが可能な救済の場としての有相の極樂淨土を構え、自らもまた人格的な対応をなす仏となったと解釈されているのです。この点は、淨土宗において極樂淨土及び阿弥陀仏の有相性を考える上で極めて重要なことです。かつて藤堂恭俊台下は極樂淨土及び阿弥陀仏の有相性について「凡夫の性である執着を、濟度のために阿弥陀仏が逆手に取る」という趣旨の説明をされたことがありますが、まさしく指方立相の極樂淨土や阿弥陀仏の有する特徴は、私たち凡夫が無執着の境界に入ることができない故に阿弥陀仏が発願し成就されたものなのです。法然上人が善導大師の語を引用して『選択集』第八章において、

すなわち彼の無漏無生の国に入^いって、永く不退の位を証悟することを得んやと。⁽²⁰⁾

としているのは、極樂淨土が有相でありながら「無漏無生」であることを言い表したものであるから、その有相性は執着の段階のものではなく、あくまでも無漏の境界にあつての有相（莊嚴）です。真如の境界を阿弥陀仏が有相化せしめたものが極樂淨土であるということとは、

非常に重要なことなのです。

5 阿弥陀仏の四十八願

『無量寿経』上巻には、

・計り知れない昔、錠光如来が出現し、その後五十三仏が出現し、その次に出現された
仏を世自在王如来という。

・その時に国王があり、世自在王如来の説法を聞き、無上菩提を求める心を起こし、王
位を捨てて沙門となった。それを「法蔵比丘（菩薩）」という。

・法蔵比丘は世自在王如来に対し、どのような浄土を建立すべきか、また諸仏の浄土建
立の因縁について説いてほしいと懇願し、世自在王如来は、法蔵菩薩のために二百一
十億の浄土の往生人の善悪や国土の勝劣を説き、法蔵菩薩の願いのままに、それらを
現じて示した。

・法藏比丘は、世自在王如来の説く浄土を具に把握し、五劫の間思惟して、衆生済度のために四十八の本願を建てた。

と説かれています。この四十八願について法然上人は、『無量寿経釈』において、四十八願には拔苦与楽の義があるとし、

大悲 〓 拔苦 〓 出離生死

大慈 〓 与楽 〓 往生極樂

と説明されています。⁽²¹⁾これは、阿弥陀仏が私たちにマイナスとなるようなことはなさらないことを示しています。阿弥陀仏の本願の中には「衆生に試練を与えてくを気づかしめる」とか「衆生に罰を与えて成長させる」というような誓いの内容は示されていないことを再確認する必要があるでしょう。

また『念仏大意』においては、

かくのごときの末代の衆生を阿弥陀仏か予ねて解りたまいて、五劫の間思惟して四十八願を發したまえり。⁽²²⁾

と述べています。宗内のある講習会で、「浄土宗のお念仏の教えは、鎌倉時代の民衆に対して説かれたものであり、今の時代にはそぐわない」という発言を聞いたことがあります。阿弥陀仏は末法の凡夫を想定し、五劫思惟して本願を立てられていることを忘れてはなりません。そもそも私たちは凡夫であり、その凡夫の思惟はただか数年から数十年のものでありますから、阿弥陀仏の選択に対して異論をとなえるというのは、浄土宗僧侶のなすべきことではありません。さらに、『選択集』の第三章には、阿弥陀仏の往生行の選択について、

すなわち今は前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選擇して専称仏号を選択す。故に選択と云うなり。⁽²³⁾

と説かれています。法然上人は、二百一十億の諸仏の浄土から悪しきものを「選擇」し、最善なるものを「選択」することを「選択」とであると定義した上で、阿弥陀仏が布施・持戒・

孝養父母等の諸行を「選捨」して念仏一行を「選取」したことが「選取」であるとしているのです。私たちは、瞑想やマインドフルネスは、往生のための行としては阿弥陀仏が選捨したものであることを肝に銘じなくてはなりません。第十二願（光明無量の願）、第十三願（寿命無量の願）も阿弥陀仏の選択です。

こういった阿弥陀仏の四十八願建立の背景には、劣機を基準とするという明確な救済意志があります。『往生大要抄』には、

『観経』の下品下生を見るに「十悪五逆の罪人も一念十念に往生す」と説かれたり。

——中略——また『双卷経』の奥に「三宝滅尽の後の衆生乃至一念に往生す」と説かれたり。

——中略——この二つの心をもて弥陀の本願の広く摂し遠く及ぶ程をば知るべきなり。重きを挙げて軽きを摂め、悪人を挙げて善人を摂め、遠きを挙げて近きを摂め、後を挙げて先を摂むるなるべし。まことに大悲誓願の深広なる事たやすくことばをもて述ぶべからず。心を止めて思うべきなり。⁽²⁴⁾

とあります。法然上人は、阿弥陀仏の本願について「広く摂す」「遠く及ぶ」と述べます。

広くというのは、五逆という重罪の者であっても救済するということであり、遠くというのは末法万年の後の法滅の世の者であっても救済されるということです。このように阿弥陀仏の救済が、劣機を基準としていることを忘れてはなりません。その上で、「重きを挙げて軽きを摂める」悪人を挙げて善人を摂める」と「遠きを挙げて近きを摂める」後（法滅）を挙げて先（末法の始め）を摂める」が示されているのです。『選択集』第十一章には、

極悪最下の人⁽²⁵⁾の為に極善最上の法を説く所。

とあります。「極悪最下の人」とは、私たち凡夫のことです。私たちは、五逆罪というような重罪は自分とは無関係であり、極悪最下とまでいえないと思います。けれども、実際に行動に移さなかっただけで心の中では恐ろしいことを考えてしまう瞬間があるのではないのでしょうか。その意味において、私たちは重罪を犯す可能性を有してしまっていることを忘れてはならないのです。そういった私たち凡夫のために阿弥陀仏は、極善最上の法であるお念仏を提示してくださっているのです。そして、阿弥陀仏の救済が劣機を基準としていないということは、阿弥陀仏が一部の勝れた者を救済の対象としていたのではなく、現代的に言え

ば、「弱者・挫折者・失敗者」こそを救いの対象としていることを示しているものに他なりません。

6 阿弥陀仏の救済の特徴

法然上人は『逆修説法』一七日において真化二身論によって阿弥陀仏を次のように説明しています。

今且く真身・化身の二身を以て弥陀の功徳を讃嘆し奉る。此の真化二身を分かつこと、双卷經の三輩の文の中に見えたり。先ず真身とは、真実の身なり。弥陀因位の時、世自在王仏の所に於いて四十八願を發したもうての後、兆載永劫の間、布施・持戒・忍辱・精進等の六度万行を修して、顕したまえる所の修因感果の身なり。——中略——是くの如き八万四千の相有り。一々の相に各八万四千の好有り、一々の好に各八万四千の光明有り。其の一々の光明は遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず、身色は

夜摩天の閻浮檀金えんぶだんごんの色の如し。——中略——次に化身とは無にして欬たちまち有なるを化と云うは、機に随い時に応じて身量を現じ大小不同なり。經に云く、大身を現じて虚空の中に満ち、或いは小身を現じて丈六八尺なりと。化仏に就いて多種有り。先ず円光の化仏とは、經に云く、円光の中に於いて百万億那由他恒河沙の化仏有り。一々の化仏衆多無數の化菩薩を以て眷属と為す。次に攝取不捨の化仏とは、光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨とは、是れ真仏の攝取なり。此の外に化仏攝取有るなり。三十六万億の化仏各真仏と共に十方世界の念仏の衆生を攝取したまうなり。次に來迎引接の化仏とは、九品の來迎に各々化仏有り。品に随いて多少有り。上品上生の來迎には、真仏の外に無數の化仏あり、上品中生には千の化仏あり、上品下生には五百の化仏あり。乃至是のごとく次第に減じて、下品上生には真仏來迎したまわず。ただ化仏化觀世音化大勢至を遣わす。その化仏の身量、或いは丈六八尺なり。化菩薩の身量も其れに随う、下品中生には天花の上に化仏菩薩ありて來迎したまう。下品下生には、命終の時金蓮華のなおし日輪の如くなるが其の人の前に住するを見る。文の如きは化仏の來迎も無き様に見たりといえども、善導の御意は觀經の十一門の義に依らば、第九門に命終の時、聖衆迎接し給う不同、去る時の遲疾を明かす。また今此の十一門義は、九品の文に約對するに、一々の品の中に皆な

此の十一有りと云えり。然れば下品下生の中にも来迎あるべきなり。而るを五逆の罪人その罪重に依りて、正しく化仏菩薩を見ることあたわず、ただ我が座すべき所の金蓮華ばかりを見るなり。⁽²⁶⁾

この真化二身論は、『無量寿経』の三輩段に基づくものです。真身とは真実の身であり、法蔵菩薩が世自在王如来のもとで四十八願を発した後、兆載永劫ちようさいようこうの間の修行によって得られた「修因感果身」です。真身は、概念的には報身と異なるものではありませんが、ここでは他の仏にはみられない阿弥陀仏の特徴が示されます。法然上人は『観無量寿経』の真身観に基づいてまず阿弥陀仏の相好について説明した後に、真身の功德として光明攝取について説明しています。化身については、衆生の機根に応じてにわかに出現する身であるとした上で、「日光の化仏」「攝取不捨の化仏」「来迎引接の化仏」について説明しています。この内、攝取不捨の化仏の箇所では「光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨」について真仏の攝取であると述べていることは重要な点です。また、来迎引接の化仏の説明では、品位によって真仏と化仏の来迎に相違があることが示されています。上品上生は真仏と無数の化仏、上品中生は真仏と千の化仏、上品下生は真仏と五百の化仏というように次第します。下品下生に関して

は、『観無量寿經』では化仏の来迎がないように説かれています。法然上人は善導大師の釈に基づきながら、罪重のために見ることができないだけであり、実際には化仏化菩薩の来迎があるとしていることは注目せねばなりません。

このように法然上人は、真化二身論によって阿弥陀仏を説明していますが、端的にいうならば、阿弥陀仏の真身は「本願成就」であり、「光明攝取」「来迎引接」という救済作用を有し、化身は「光明攝取」と「来迎引接」という救済作用があることを説いているのです。

法然上人は『ある人に示すことば』の中で、

弥陀の本願を決定成就して極楽世界を莊嚴し立てて、御目を見回わして我が名を称うる人やあると御覧じ、御耳を傾けて我が名を称する者やあると、夜昼聞し召さるるなり。されば一称も一念も阿弥陀に知られまいらせずという事なし。されば攝取の光明は我が身を捨てたまう事なく、臨終の来迎は虚しき事なきなり。²⁷（傍線は筆者が挿入）

と述べられています。阿弥陀仏は四十八願を成就して極楽浄土を構え、目を見回し耳を傾けて念仏となえる者を夜昼に関わらず探してくださっているのですから、一称の念仏であっ

ても阿弥陀仏に届かないことはありません。それ故に阿弥陀仏の摂取の光明は、念仏をとなえた私たちを見捨てることなく、臨終の来迎がそらごとであることはないのです。この法語は阿弥陀仏を「本願成就・光明摂取・来迎引接」の三様態で捉えていることを示しているものといえるでしょう。

現在、日常勤行式では「三身礼」として、

南無西方 極樂世界本願成就身阿弥陀仏

南無西方 極樂世界光明摂取身阿弥陀仏

南無西方 極樂世界来迎引接身阿弥陀仏

という偈文がとなえられています。これは法然上人が説かれた阿弥陀仏の特徴を示しているということができます。

『念仏往生要義抄』の中には、光明摂取について次のような問答があります。

問いていわく、摂取の益を蒙る事は平生か臨終か、いかん。

答えていわく、平生の時なり。その故は往生の心まことにて我が身を疑う事なくて来迎を待つ人はこれ三心具足の念仏申す人なり。この三心具足しぬれば必ず極楽に生まるといふ事は『観経』の説なり。かかるころざしある人を阿弥陀仏は八万四千の光明を放ちて照らしたまうなり。⁽²⁸⁾ 平生の時照らし始めて最期まで捨てたまわぬなり。かるが故に不捨の誓約と申すなり。

この中で、法然上人は光明摂取の利益について平生の利益であると明言されています。私たちの最終的な救済は浄土往生ということになりますが、念仏衆生は平生より阿弥陀仏の摂取不捨の光明に照らされ、その中で日々を過ごすことができるのです。

『浄土宗略抄』には、来迎について次のように説かれています。

またまめやかに往生のころざしありて、弥陀の本願を憑^{たの}みて念仏申さん人、臨終の悪^{わる}き事は何事にかあるべき。その故は、仏の来迎したまう故は、行者の臨終正念のためなり。それを心得ぬ人は、みな我が臨終正念にて念仏申したらん折⁽²⁹⁾ぞ、仏は迎えたまうべきとのみ心得たるは、仏の本願を信ぜず、経の文を心絵^えぬなり。

法然上人以前は「正念来迎（亡くなりゆく人が正念に至れば来迎がある）」という教えが説かれていましたが、法然上人は「来迎正念（阿弥陀仏の来迎によって正念に導かれる）」という教えを示されました。これは『称讃浄土経』と『阿弥陀経』を根拠にされています。法然上人は、『逆修説法』及び『往生浄土用心』において、亡くなりゆく凡夫が起こしてしまいう三種の愛心（境界愛・自体愛・当生愛）は、阿弥陀仏の来迎によって滅せられ正念に至り往生するとされています。

『往生浄土用心』には、阿弥陀仏と私たちの関係について、次のように説かれています。

衆生仏を礼すれば仏これを見たまう、衆生仏を称うれば、仏これを聞きたまう、衆生仏を念ずれば仏も衆生を念じたまう。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて、仏も衆生も親子のごとくなる故に親縁と名づく。⁽³⁰⁾

これは、

阿弥陀仏 衆生

見 ↓ ↑ 礼

聞 ↓ ↑ 称

念 ↓ ↑ 念

と整理することができます。真言宗の三密加持では、衆生の身口意の三業と大日如來の身口意の三業が一体化・同一化することが説かれますが、浄土宗ではそのようには捉えません。藤堂恭俊台下は、この説示について次のように説明されています。

「かれこれ、ひとつになる」という「ひとつ」は、仏と凡との入我我入といった状態・境地を指すのでなく、むしろ今まで無関係にあった仏と凡が称名念仏を中心とする宗教行為とおして、「親子のごとき」関係を結び、親しく、むつまじい心情を持って、触れあい、対応し呼応しあうことになるから、いきおい心情的に仏と凡とが「ひとつ」に融けあうことを意味している。³¹⁾

このように、浄土宗の場合は、阿弥陀仏と衆生がお念仏によって「呼応関係」を築くことができるのです。つまり、私たちはお念仏をおとなえることによって、阿弥陀仏と親しく離れない状態にさせていただけるのです。法然上人が、仏凡の一如・不二は説いていないことは、教学上非常に重要な意味を持ちます。何故ならば、娑婆に生きる以上、私たち凡夫は煩惱を断じ尽くすことができない存在であるからに他ならないからです。こういった現実の直視こそが法然上人の教えの大切な点なのです。法然上人は、凡夫が不二や一如と無縁であることを指摘された上で、その凡夫を常にあたたく見護り、浄土に往生させてくださる阿弥陀仏を説かれているのです。

7 抑止門と摂取門——廃悪修善と悪人救済

『無量寿経』の第十八願には「唯除五逆誹謗正法」と説かれ『観無量寿経』の下品下生には「五逆の衆生の救済」が説かれています。この經典間の矛盾については、善導大師の『観経疏』に説かれる抑止門おくしもんと摂取門の解釈に基づきます。それは次のように整理することができます。

きます。

抑止門―第十八願に説かれる「唯除五逆誹謗正法」―未造惡（未だ惡をなさない者）
攝取門―下品下生に説かれる「五逆の衆生の救済」―已造惡（已に惡をなした者）⁽³²⁾

つまり、阿弥陀仏は、念仏一行によってどのような惡人であっても救済するのであるが、その一方で衆生が罪を犯さないように願っているのです。⁽³³⁾

法然上人は『正如房へ遣わす御文』において、

されば『觀無量壽經』に説かれてさうろうは、生まれてよりこのかた念仏一遍も申さず、それならぬ善根もつやつやなくて、朝夕もの殺し盗みし、かくのごとき^{もろもろ}の諸の罪をのみ造りて年月をゆけども一念も懺悔の心もなく明かし暮らしたる者の、終りの時に善知識の勧むるに遇いてただ一声南無阿弥陀仏と申したるによりて、五十億劫が間生死に廻るべき罪を滅して、化仏菩薩三尊の来迎に預りて、仏の名を称うるが故に罪滅せり、我れ来たりて汝を迎う、と讃められまいらせてすなわちかの国に往生すとさうろう。また

五逆罪と申して現身うつしみに父を殺し母を殺し惡心をもて仏を殺し諸宗を破し、かくのごとく重き罪を造りて一念懺悔の心もなからん、その罪によりて無間地獄に墮ちて多くの劫を送りて苦を受くべからん者、終りの時に善知識の勸によりて南無阿弥陀仏と十声称うるに、一声に各八十億劫が間生死に廻るべき罪を滅して往生す、と説かれてそうろうめれば、さ程の罪人だにもただ十声一声の念仏にて往生はしそうらえ。まことに仏の本願の力ならではいかでかさる事そうろうべきと覺えそうろう。本願虚しからずという事はこれにても信じつべくこそそうらえ。これは正しき仏説にてそうろう。仏の御ことばは一言も謬あやまらずと申しそうらえば、ただ仰まをぎても信ずべきにてそうろう。これを疑わば仏の御空事おんそんごとと申すにもなりぬべくそうろう。却かえりてはまたその罪もそうらいぬべしとこそ覺えそうらえ。深く信ぜさせたまうべくそうろう。⁽³⁴⁾

と述べ、下品下生について説明しています。念仏もとなえず善根も積まず、殺生や窃盜といった重罪を犯しながらまったく懺悔をしなかった者が、臨終に善知識の勸めによって一声の念仏をとなえたことよって、五十億劫の間生死輪廻せねばならない罪が滅せられ、阿弥陀仏の化仏、化觀音勢至両菩薩の來迎を受けて往生したことが説かれます。そして、五逆罪を

犯し、まったく懺悔心のないものは無間地獄に堕ちて多くの苦しみを受けるはずであったが、臨終に善知識の勧めによって一声の念仏をとなえたことによって、八十億劫の間生死輪廻せねばならない罪が滅せられて往生することができると説かれているのであるから、五逆罪の者であっても一声十声の念仏によって往生できるとし、阿弥陀仏の本願力の偉大さを説いています。

このように、懺悔心のなかった罪人や五逆罪の者が善知識の勧めによって念仏をとなえ救済されることが示されていますが、ここで注目されるのは法然上人が『観経』の下品下生に基づいて五逆罪等の救済を説いていることです。もし仮に法然上人が善導大師の「抑止・摂取」の教えを踏まえていなければ、第十八願中の「唯除五逆誹謗正法」の問題がある以上、下品下生に阿弥陀仏の本願力を関連させて五逆罪の衆生の救済を説くことはできないはずです。したがって、「(a)下品下生に基づき五逆の衆生の救済を説くこと」や「(b)五逆の衆生の救済が本願力によってなされること」は、第十八願文と下品下生の矛盾を処理していることを意味するものであり、善導の「抑止・摂取」の解釈を踏まえていることが確認できるのです。

『或人に示すことば』では、

また罪を恐るるは本願を輕^{かろ}しむるなり、身を慎みてよからんとするは自力を励むなりという事は、ものも覚えぬ淺ましき僻事^{ひがこと}なり。ゆめゆめ耳にも聞き容^いるべからず。露塵^{つゆちり}ばかりも用いまじき事なり。始め「浄土三部經」より唐土日本の人師の御作の中にも全くなき事どもを心に任せて我が思うさまに悪からんとていい出したることなり。一定として三惡道に墮ちんずる事なり。一代聖教の中にふつとなき事なり。五逆十惡の罪人の臨終の一念十念によりて來迎に預かる事は、その罪を悔い悲しみて助けおわしませと思いて念仏すれば弥陀如來願力を起して罪を滅し來迎しますなり。本願のままに書いて參らせそうろう。このままに信じて御念仏そうろうべし。かまえてかまえて貴き念仏者にておわしませ。⁽³⁵⁾

と述べています。法然上人は、罪を恐れることは本願を輕視することであり、身をつつしんで善いことを行おうとすることは自力を励むことになるという解釈に対し、まったくの間違いであり決して聞き入れるべきでなく、用いてはならないと強調しています。さらにはこのような論は、「浄土三部經」にも中国や日本の人師の書物にも説かれていないことを指摘し、

必ずや三惡道に墮ちるとし、一代仏教にない教えであるとしています。そして、五逆十惡の罪人が、（善知識の勧めに基づき）臨終の一念によつて來迎に預かるということは、自らの犯した罪を悔やみ悲しんで救いを求めて念仏をとなえたならば、阿彌陀仏が本願力によつて罪を滅し淨土に迎えるということであるとし、このことが本願の意であり、そのように信じて念仏を申すようにと説いています。³⁶⁾

罪惡を恐れないことは本願を輕視することであるとし、修善を自力とみなすことを否定するということは、換言すれば、本願を重視する者は惡を恐れるのであり、修善を励むことは、自力ではないということになります。特に本願を重視する者は惡を恐れるという考え方は、第十八願中の「唯除五逆誹謗正法」の語を前提としてのものであるといえるでしょう。また五逆十惡の罪人が一念十念によつて救済されるというのは、下品下生の説示を前提としてのものです。すなわち、衆生が罪惡を恐れて善を修するということを心がけるのが大切であることを示すのは、抑止門を踏まえてのものであり、五逆十惡の衆生が罪を懺悔した念仏によつて救済されるというのは、摂取門を踏まえてのものであるといえるのです。もし仮に善導大師の「抑止・摂取」の解釈を前提にしていけないのであれば、「㉔本願を重視する者は惡を恐れる」ことと「㉕五逆十惡の罪人の救済が本願力によつてなされること」は両立しえない

からです。

このように、『正如房へ遣わす御文』『或人に示すことば』において法然上人は直接的に善導大師の「抑止・摂取」について説明を加えていませんが、その解釈を踏まえていると考えられるのです。法然上人は『諸人伝説のことば』において、

それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただ生まれつきのままにて念仏する人を念仏に助ささぬとは申すなり。さりながらも悪を改めて善人となりて念仏せん人は仏の御意に契うべし。⁽⁸⁷⁾

と述べています。「善人は善人ながら、悪人は悪人ながら」という生まれつきのままの念仏を説きながらも「悪を改め善人となつて念仏する」ことが仏の御心になうことであるとしているのです。阿弥陀仏が選択された往生行が念仏である以上、「廢惡修善」は往生の可否には関係ないにも関わらず法然上人は、念仏実践の中で悪から善へと転換していくことが仏の意に添うことであることを明らかにしています。注目すべきは、悪を改め善人となることについての根拠を「ほとけの御心になう」として仏辺（仏の側）に求めていることであり、

このことは、法然浄土教の大きな特徴であるといえるでしょう。このように法然上人は、悪人救済を説きますが、悪を単純に肯定しているわけではありません。一方で廃悪修善が明確に説かれているのであり、廃悪修善を旨に生きながらも悪をなしてしまふ凡夫の救済が、法然上人の説くところなのです。浄土宗においては摂取門に説かれる阿弥陀仏の大慈悲を大切に捉えつつ、抑止門も説いていく必要があります。

8 浄土宗では説かない法身の弥陀

前述した通り、道綽・道綽・善導大師・法然上人は、阿弥陀仏の仏格を報身と定義しています。しかしながら、宗内においては法身の弥陀を説く方もおられます。これが、何故問題であるのか、以下、考えてみたいと思います。

天台宗の忍空は『勸心往生論』（一一五五年に再治）において「無量寿―三世に通じる豎の利益―法身常住の妙徳、無量光―十方世界を摂取する横の利益―般若照明の妙徳、無量清浄光―衆生の業垢を消滅させる利益の用―解脱無累の妙徳」とした上で次のように述べてい

ます。

此れ三徳の体即ち是れ万法、三諦にあらざることなきが故なり。故に知りぬ万法即ち是れ弥陀なり。⁽³⁸⁾

すなわち、阿弥陀仏の三徳の体が即万法であり、三諦でないことがないという故に万法（法身）が阿弥陀仏の顕現であるとするのです。

苦道は即ち法身なり。無始生死、二死、三界、四生、五趣、六入、七識、八寒八熱、九居、十界、二十五有、三千の依正、みな寂靜の門なり。即ち是れ弥陀内証の妙理、外用の色身なり。⁽³⁹⁾

ここでは、三道の一つである苦道（煩惱と業によってなされる輪廻）がそのまま法身であるとき、以下無始生死、二死、三界、十界、二十五有、三千の依正が寂靜の門であるとき、つまり、万法が弥陀であるから、森羅万象すべての存在（地獄・餓鬼・畜生の三惡趣

までもが）阿弥陀仏の内証の妙理、外用の色身の顕現であるとされるのです。

この説示は、非常に示唆的です。つまり、「法身（万法）」は、単に無漏性・清浄性を意味するものではなく、「浄と穢、悟と迷、無漏と有漏」のすべてを網羅することを示している

◇法身の弥陀（不二絶対・絶対的一元論）



◇報身の弥陀（而二相對・相對的三元論）



※法身とは、無漏と有漏の両義を含む包括的な概念である。法身の弥陀を立てたならば、而二相對論は成立しない。

からです。このような考え方では、貪・瞋・癡の三毒等の、仏教において衆生が厭うべき項目もすべて阿弥陀仏の顕現ということになるのです。ここで私が申し上げたいのは、法身という概念は、浄土と穢土、仏と凡夫等のすべてを包括する論理であり、不二・一如とするということ⁽⁴⁰⁾です。

また、法身の弥陀とは、森羅万象を司っている存在ということになります。したがって、私たちにとってプラスとなることだけでなく、マイナスとなることも与える（法身の現れ）ということになり肯定されてしまいます。これに対して法然上人の説かれる阿弥陀仏は救済者であり、凡夫は被救済者です。娑婆は厭うべき穢土であり、浄土とは娑婆を超越した世界（西方浄土）です。今現在の私たちは、迷いを持った凡夫であり、娑婆は穢土に他ならないのです。

9 おわりに

そもそも、娑婆を穢土と捉え、穢土を厭い、浄土を願うというのは、「浄土三部経」の世

界観です。娑婆において、迷悟不二・仏凡一如という境界に入れない凡夫のために、迷悟不二・仏凡一如等の真如の境界をさとした阿弥陀仏が浄土を建立したのです。「浄土三部経」には、阿弥陀仏が一切の存在の根源であるとか、法身を根源とするという説示はみられません。阿弥陀仏は、あくまでも凡夫の救済者なのです。その阿弥陀仏が法身の顕現もしくは法身であるとするならば、浄土のみならず地獄も穢土もすべてその顕現であることになります。なぜならば法身は無漏有漏のすべての根源であり、すべてを包括するからです。また、そこから導き出される論理とは、凡夫も穢土も仏も浄土も法身の顕現であり、本来的には同一とされることになりますから、浄土及び阿弥陀仏の存在自体が衆生側の捉え方によって変化することになりますので、阿弥陀仏が凡夫の救済者であり報身であるという論理は成立しなくなってしまうです。

法然上人が提示したのは、凡夫の救済者としての阿弥陀仏であり、凡夫の救済の場としての極楽浄土です。阿弥陀仏とは、『無量寿経』に説かれるように法蔵比丘の願行成就によって成仏した報身です。そしてその阿弥陀仏は法身を根源にする仏ではなく、すべてを包括する法身でもありません。無漏の境界において有相の仏身と有相の浄土を現した仏なのです。法身の阿弥陀仏を説くことは、「捨此往彼」の論理に沿わないものであり、「而二相對」の論

理を根底から覆すことになってしまふのです。

しばしば見聞する「阿弥陀仏より病を給わった」とか「阿弥陀仏が試練のためにくを与えた」という類の説明や、「阿弥陀仏から命を給わる」という内容は阿弥陀仏が森羅万象を司っている法身という前提があって成立するものですが、こういった考え方は法然上人の教えの中にはないもののなのです。阿弥陀仏の本願の中にも「衆生に試練を与えてくを気づかしめる」とか「衆生に罰を与えて成長させる」というような誓いの内容は示されていないのですから、まったく根拠のない論理であると言わなくてはなりません。法然の説く阿弥陀仏は衆生の救済者であり抜苦与楽の仏です。すなわち、阿弥陀仏は衆生の苦しみを取り除くと共に安らぎを与える仏であって、決して悲しみや苦しみを与えたりしないのです。あくまでも阿弥陀仏は、衆生救済のための本願を成就し、光明攝取と来迎引接という作用で衆生を救済する仏なのです。

「迷と悟」「穢土と浄土」が不二であるという捉え方ができないのが、凡夫であり、娑婆に生きる凡夫は法身の境界に入ることとはできないというのが法然上人の立場です。その上で私たち凡夫が生死解脱することが可能な教えとして阿弥陀仏による救いを示されたのです。法然上人が現世でのさとりや、すでに救われている（一如・不二）ことを説かなかったのは、

娑婆に生きる以上、私たち凡夫は煩惱を断じ尽くすことができない存在であるからです。末法の凡夫にとっては、浄土の一門しかないのであり、浄土宗の僧侶の役目は、この真実を伝え、一人でも多く念仏をとなえていただくことにあります。法然上人は、禅勝房に対して、

その極楽の主にておわします阿弥陀仏こそ、何事も知らぬ罪人共の、諸仏・菩薩にも捨て果てられ、十方の浄土にも門を鎖されたる輩を、易々と助け救わむという願を起こして、十方世界の衆生を来迎し給う仏よ、賢くぞ思いより給いける。⁽⁴¹⁾

と述べておられます。私たちは、諸仏・菩薩に見捨てられ、十方の浄土から門を閉ざされた存在です。そういった凡夫を、見捨てることなく受け入れ救済してくださるのが外ならぬ阿弥陀仏なのです。

法然上人がお説きになった阿弥陀仏とは、娑婆で悩み苦しむ私たち凡夫を否定することなく、常にあたたかく見護り、浄土に往生させてくださる仏さまなのです。

【註】

- (1) 『聖典』四・四二一頁
- (2) 『印度学仏教学研究』三八
- (3) 『日本仏教学会年報』七六
- (4) 佐伯真光著『アメリカ式・人の死にかた』（自由国民社、一九七三）三一九～三二〇頁。
- (5) 同、三二九頁
- (6) 浄土宗では、報身を「ほうしん」と読みます。
- (7) 『昭法全』二七一～二七二頁
- (8) 『浄全』一・六七六頁・上～下
- (9) 『聖典』二・一八二～一八三頁
- (10) 『昭法全』七八～七九頁
- (11) 三業を有するが、それは凡夫の三業を超越したものである。
- (12) 高橋弘次著『改版増補 法然浄土教の諸問題』参照（山喜房仏書林、一九九四）
- (13) 『聖典』四・三二四頁～三二六頁

(14) 『聖典』四・三〇二頁

(15) 『教化研究』七二(真宗大谷派、一九七四)

(16) 同、七頁。

(17) 『聖典』三・一一八頁

(18) 本来、凡夫が享受できるのは、外用の功德ということになりますが、法然上人は万徳所歸を説き、内証の功德をも私たちが享受できるとしている点は重要です。

(19) ここで用いている「出出世間」という語は、無相である「出世間」の仏智の境界よりさらに有相(莊嚴)の境界に出るという意味です。こういった用法は、望月信亨博士『略述浄土教理史』(三〇頁。浄土教報社、一九二二)の「その浄土は後得智所生の出出世間善根の功能から現れて云々」という一説に基づくものです。

(20) 『聖典』三・一四六―一四七頁

(21) 『昭法全』七四頁

(22) 『聖典』四・三四二頁

(23) 『聖典』三・一一七頁

(24) 『聖典』四・三一四頁

- (25) 『聖典』三・一六一頁
- (26) 『昭法全』二二三～二二三頁
- (27) 『聖典』四・五一二頁
- (28) 『聖典』四・三二八～三二九頁
- (29) 『聖典』四・三五八頁
- (30) 『聖典』四・五五〇頁
- (31) 「阿弥陀仏信仰論——とくに仏凡の呼応關係を中心として」(『浄土教文化論——阿
弥陀仏篇』二〇頁。山喜房仏書林、二〇〇四)
- (32) 『聖典』二・三一八～三二〇頁
- (33) 抑止門の主体が阿弥陀仏(法蔵菩薩)であることについては、聖光上人が法然上
人の解釈を『西宗要』(『浄全』一〇・二二七頁・下)において伝えています。拙
稿「抑止門と摂取門——特にその主体をめぐって——」(廣川堯敏教授古稀記念『浄土
教と佛教』)をご覧くださいただければ幸いです。
- (34) 『聖典』四・四二五～四二六頁
- (35) 『聖典』四・五一三頁

(36) ここで注目されるのは、「罪を悔い悲しみて助けおわしませと思ひて念仏」するという言葉です。法然上人は、五逆十惡の救済を説いていますが、そこで要請されるのは罪を懺悔しての念仏であることを忘れてはならないのです。

(37) 『聖典』四・四八六～四八七頁

(38) 『淨全』一五・五三七頁・下

(39) 『淨全』一五・五三八頁・上

(40) こういった見方は、さとした者の見方です。これを、凡夫の世界に持ち込むと、単なる現状肯定論になります。

(41) 『聖典』六・六九九頁

◎第2章◎

宗祖のご法語をいただいて

一、阿弥陀さまとわたし

青森教区弘南組 遍照寺

花田 俊岳

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、のたまわ

「阿弥陀仏は不取正覺の言を成就して、現にかの国にましますば、定んで命終みょうじゆうの時には来迎し給わん」と。(十念)

(「一紙小消息」 Ⅱ 『浄土宗信徒日常勤行式』より)

本日はお十夜ということでお参りいただいております。繰り返し何度もお話ししておりますが、お十夜は西方極楽浄土の主、阿弥陀仏さまのおさとの記念、そのお祝いのお勤めです。

阿弥陀さまがおさとりを開かれた、別の言葉で言うとお仏さまになられた、ということです。なぜそのことをお祝いするのか、阿弥陀さまが仏となられたことと、私たちにどんな関わりがあるのか、という点についてお話しいたします。

冒頭に拝読いたしましたのは、浄土宗をお開きくださった元祖大師・法然上人の「一紙小消息」というお手紙の一節です。御忌の折にお話ししておりますように、法然上人は智慧第一と讃えられた方で、日本の歴史の中でも有数の天才であります。ことに日本の仏教の歴史は、法然上人の前と後、というかたちではつきりと姿を変えています。このことは後ほど触れます。

この「一紙小消息」の一節は、まさにその法然上人の天才の現れの典型だと戴いております。なぜかといえば、この一節で、阿弥陀さまという仏さまがどういってお方なのか、そして私たちと阿弥陀さまの関わりはいかなるものなのか、実に簡潔に、明確にお示しくださっているからです。阿弥陀さまについて説かれたお経はたくさんありますし、また多くの祖師高

僧が阿弥陀さまについてお示しになっていますが、その全てがこの一節にまとめられているのです。三つに分けて見ていきます。

「阿弥陀仏は不取正覚の言^{ことば}を成就して」

ご承知のように、阿弥陀さまはかつて国王の地位にありました。それが全ての人を救いたいという願を起こされて、法蔵比丘という一修行者となりました。そしてまず、いかにして全ての人を救おうかという手だてを考えられました。これを五劫思惟と申します。「寿限^{じゅげん}無^む」という落語に「五劫のすりきれ」という言葉が出てきますが、要するに想像を絶するほど長い時間ということです。その末に四十八の願を建てられて、その一つ一つの願ごとに「私はこのようにして、人々を救いたいと願う。もしこれがかなわなければ正覚を取らない」と誓われました。四十八の願を成就することで全ての人を救う。もしたとえ一人でも救い漏らすことがあったら、「不取正覚」「正覚を取らじ」つまり仏とらないということです。どれだけ長く厳しい修行を積もうとも、ただの一人でも救い漏らすようなことがあれば仏とはならない。ある書物には、「救いから漏れたその人とともに、地獄の釜を焚く薪とな

って焼かれても悔いはない、との思いである」と説かれています。阿弥陀さまのこれほどの思いが、私たち一人一人に注がれているのです。

この「不取正覚」の誓いをもって、法蔵比丘はさらに長い長い間修行を重ねられ、ついに阿弥陀仏となりました。『阿弥陀経』というお経には「阿弥陀さまが仏となられてから十劫の時がたっている」とありますので、この「阿弥陀仏は不取正覚の言を成就して」ということは、十劫の昔、過去の出来事です。そしてその遠い過去から、阿弥陀さまは私たちのことを、この私のことを心にかけて、思ってくださっていたのです。「お前を救うために私は仏となったのだよ」。阿弥陀さまのお声が聞こえてきます。

「現にかの国にましましてば」

十劫の昔に仏となられた阿弥陀さまは、今現在、かの国、すなわち西方極楽浄土におられます。仏となられても阿弥陀さまの思い、願いはかわりなく、「この私」を救おうとしておられます。法然上人は、阿弥陀さまは極楽におられて、どこかでお念仏をとなえる人がないかと常に耳を傾け、目を見回しておられる、とお示しです。私たちが阿弥陀さまのことなど

忘れて、欲にまみれて毎日を暮らしている間も、四六時中絶えることなく阿弥陀さまの思いが降り注がれています。それは十劫の昔から変わることなく、今に至っているのです。思えば、気付かなかったとはいえ、私は長い長い間、そうした阿弥陀さまの思いに背を向けて過ごしてきました。あるいは人に生まれることができず、仏法に縁がなかったこともあったでしょう。地獄の底で苦しみを受けたこともあったかもしれません。また人として生まれ、仏の教えを耳にしながら、信じることなく生涯を終えたこともあったでしょう。その間も、阿弥陀さまは私を思っていてくださった。いわば、これは片思いです。しかも、阿弥陀さまが私を思い続けていてくださったのです。今この時に至って、法然上人のお導きによってようやく私はその阿弥陀さまの思いを知ることができました。自分の欲に従って生きることしかしてこなかった、そんな愚かな私を、親よりも深い思いで見えてくださった。これまでどれだけ阿弥陀さまに悲しい思いをさせてきたことか、申し訳ないという思いと、この上ないありがたさを感じます。これは、今現在の私と阿弥陀さまの関わりです。片思いが両思いに変わったのです。

「定んで命終の時には来迎し給わん」

阿弥陀さまの思いに気がついて生きる私ですが、やがてこの世での命が終わる時がきます。欲まみれ、泥まみれで生きてきたこの世を去る時、私たちは何が出来てでしょうか。生きている間であれば好きなままに生きてきた、思い通りに出来たことも、いよいよ死を迎える時には何一つ出来ることはありません。昨今「終活」といったことがやりですが、「終活」はこの世の命が終わった時の諸般の処理についての指示に過ぎません。この世の命が終われば、もう一切がおしまい、ということであれば、そこに注力することも必要でしょう。ではこの世の命が終わったあとのことはどうすればいいのでしょうか。

よくいわれるように、生前の罪の軽重を計られて、それによって次に生まれるところが定まるのであるとしたらどうでしょうか。

「いや、私は生きている間、善いことをし続けてきたから、間違いないところに生まれるに違いない」。そんな確信をもつて最期の時を迎えることの出来る人がどれだけいらっしゃるでしょうか。指折り数えてみれば、よくてせいぜい善悪半々ぐらいではないですか。とすれば、最期、目を閉じるとき、私たちは自分の命の行く末については、本来何の確信ももてないということになります。これほど怖ろしいことはないのではないですか。

ところが阿弥陀さまは、「定んで命終の時には来迎したまわん」、必ずご来迎してください、行く末を自ら定めることのできない、知ることのできないこの私を、自らお迎えに来てくださるというのです。

遠い遠い昔、この私を救うために誓いをたてられて、長い長い修行をしてくださいました。そして仏となられてからも、ずっと私を思っていてくださった。その阿弥陀さまがついにこの世の命を終える私を、ご自身で迎えに来てくださる。長く片思いしてくださいました阿弥陀さまに、ようやくお目にかかることができる。迷いと不安、苦しみ悲しみの中で迎えないければならない命の終わりを、安らかにしてください。そしてやはり苦しみ悲しみのない、西方極楽浄土の人として迎え入れてくださるのです。阿弥陀さまと私の関わりという点から見れば、これはそう遠くない未来のことです。

前に、日本の仏教が法然上人を境にして、前と後に分かれる、と申しました。法然上人以前は、もし極楽浄土に生まれたい、阿弥陀さまにお助けいただきたい、と願うならば、自分の力、努力でその道を歩まなければならぬとされていました。

例えば、高い所に登ろうと思えば、下から順に階段を上がらなければなりません。階段が

なければ、自分で岩を積むなり、木を組むなりしなければなりません。しかも命には限りがありますので、階段を上っている途中で、時間切れになってしまえばそれまでです。力弱ければ、階段を作ることさえ難しいでしょう。そのために、法然上人より前は、極楽に生まれたいと願っても、それがかなうのは千人万人に一人いるかどうか、とされていました。いわばこれは、阿弥陀さまから寄せられる思いではなく、この私の思い、力を頼ろうとするものです。

法然上人は全仏教を深く学ばれた末に、阿弥陀さまの本当の思いを明らかにしてくださいました。そして、

「阿弥陀仏は不取正覚の言を成就して、現にかの国にましますば、定んで命終の時には来迎し給わん」

とお示しくださったのです。

こちらから階段を築き、それを上るものではありません。命の終わりのまさにその時に、阿弥陀さま自らお迎えくださるのですから、時間切れということがないのです。この世での時

間が尽きるその時が、まさに阿弥陀さまとお会いできるその時なのです。しかも私の力でどうこうということではありません。阿弥陀さまが「必ず迎えにいくよ」と約束してくださったのですから、その思いに任せれば、百人中百人、千人なら千人が必ず極楽に生まれることができる。法然上人より前は、自分の力で行くほかないとされていた極楽浄土は、法然上人によって、阿弥陀さまのお力にまかせてこそ生まれることのできるところと、はっきり示されたのです。

さてここで、私自身の経験、思いについてお話しします。

私はお寺の生まれではありません。家に仏壇はありましたが、どこかのお寺の檀家ということでもなく、確たる信仰のある家でもありませんでした。私自身は、小さいころからなぜか仏像が好きなお子でもでした。祖父の読んでいた雑誌にあった仏像の写真を切り取って、天井に貼ってそれを眺めながら寝たというおかしなお子でした。その祖父は、孫たちを連れて旅行に行くのが楽しみという人でしたので、私にとっても優しい、いい「じいちゃん」でした。その祖父が病に倒れました。肝臓がんでした。今なら助かっていたかもしれないと思いますが、四十年以上前のことです。二度手術をした後、もはや手の施しようがないということになりました。

した。退院した祖父は自宅で最期の時を迎えることとなりました。それも、身内に医師がいたから可能だったのかもしれませんが。

いよいよという時、親戚たちが集まりましたが、私は正直怖くて別室でテレビを見ていました。そこに母が「もうお別れだから」と呼びに来ました。恐る恐る祖父の寝ている部屋に入りました。部屋の窓全てにカーテンがひかれうす暗いその中に、布団を敷いて祖父は横になっていました。周りを親戚が取り囲み、その隙間から私は祖父の様子を見ておりました。

すると祖父が、そばにいた私の叔父に何か話しかけました。叔父は話を聞くと一人立って部屋を出て、ほどなくして戻ってきました。その手には、黒い手帳がありました。元気だった頃に私も何度も見せてもらった手帳でした。祖父はその手帳を、予定表にも日記帳にも使っていました。祖父は手帳を受け取ると、見る影もないほどにやせ細った手でそれを掲げて、一ページずつめくっていききました。その時、ゆっくりと手帳を見ていた祖父の目から涙がすーっと流れて落ちるのがはっきりと見えました。ほどなくして祖父は亡くなりました。

その時私は、初めて明確に「死」というものを目にしたように感じたのです。祖父はなぜ涙を流したのでしょうか。孫たちを連れて行った旅行を思い出したのでしょうか。いろいろ計画しているながら、もはや叶うことのない様々なことを思っ泣いたのでしょうか。本当のと

ころは分かりません。しかしその時私は、「死」というのは、自分の過去からも今からも、未来からも切り離されて、一人でどこかへ行くことではないのか、と感じたのです。そして、やがて私も死ぬ時には、祖父のように泣きながら死んでいかねばならないのだろうか、と思ったのです。

申しあげたように、我が家は信仰とご縁のない家でした。祖父もまたそうでした。その故に、涙と共に最期の時を迎えるしかなかった祖父。最期の時に頼るべきものを持っていなかった祖父。ならば私は、何者か頼るべきもの、その術^{すべ}を知ることができれば、別の死に方をすることができないか。そう思いました。

それから、決してまっすぐに法然上人とご縁が結ばれたわけではありませんが、ようやく今、お念仏の教え、法然上人の教えに出会い、阿弥陀さまの思いに気づき、何をすべきか、何に頼るべきかを知ることが出来たのです。今日お参りの皆さまは、幸いにして浄土宗の檀信徒ですから、おそらく生まれる前からお念仏にご縁がある。回り道してきた私にすれば、誠にうらやましいことこの上ない皆さまです。

ここにお参りの皆さま、一人一人に、阿弥陀さまからの思いが降り注がれています。遠い遠い昔からずっと、「あなたを救うために仏となつたのだよ」と思い続けていてくださっ

てきたのです。

お十夜は、十劫の昔に、私のために仏となってくださった阿弥陀さまの思いに気づき、今ようやく両思いになれたことをお祝いするお勤めです。もちろん最期の時をいかに迎えるかは誰にも分かりません。病気に苦しめられての最期かもしれない。事故や災害で突然迎えるかもしれない。でもその時に備えて、今、この私は何をすべきか知っています。祖父の姿を通じて、そして法然上人のお示しにより、お念仏に、阿弥陀さまにご縁が出来ました。最期の時に、あるいは身の苦しみなどから涙を流したとしても、私は自分の行くところを確信しています。ひとえにそれは阿弥陀さまのおかげです。

皆さま、ご自身のお葬式の算段や財産の処理も気になるところでしょうが、何より大切なのは、この命の行く末ではないですか。そのために、今何をするべきか、お念仏以外にはありません。「終活」も結構ですが、お念仏にご縁のある皆さまには、ぜひお念仏の「生活」をお勧めしたいと存じます。それが悔いなき命の最期の迎え方への唯一の道であります。

どうぞこのお十夜を大きなご縁として、お念仏の日々、お念仏の生活をお過ごしください。ますよう、お勧め申しあげます。（同称十念）

二、生ききる——この人生をいかに生き、全うするか

新潟教区新潟組

長善寺

炭屋

昌彦

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、

「信をば一念に生まると信じ、行をば一形に励むべし」と。(十念)

(『法然上人行狀絵図』二一〥『聖典』六・二七九頁)

ようこそお参りくださいました。誠にありがとうございます。どうぞ楽な姿勢でお聞きい

ただきたいと思います。

時が経つのは早いものです。年を重ねて参りますと強く感じられる今日この頃でございます。ついこの間、正月を祝っておりましたのに、もう春が間近に迫っております。日に日に寒さが和み、外に出るのが億劫がらずになってまいりました。梅の木も新芽が少しずつですが目に留まるようになってまいりました。陽射しが温かくなつてまいりますと心も体も華やいで参ります。今日も生きているという実感を持たれるのではないでしょうか。

朝起きて 夕べに顔は 変わらねど

いつの間にやら 年は寄りけり

毎朝、顔を洗い、鏡を見ておるのですが、ふと年を取ったなと感じることがございます。私たち夫婦はすでに親をお浄土に送っておりますが、正直に言つて互いに「先立つのも残るのいいや」の心境です。でも互いに行く先、待ち会う場所（極楽浄土）は確かめ合っております。行く先が決まっているということ、待ち会う場所があるのは本当にありがたいことです。そのためには大事な、必要なことがあるのです。

先ほど拝読致しましたご法語は、宗祖法然上人のお言葉です。

「信をば一念に生まると信じ、行をば一形に励むべし」とは、信心については「一念で往生できる」と信じ、行については、生涯続けて励むべきということです。

一、お浄土に往生する（信仰の目的・所求）

二、阿弥陀仏に帰依する（信仰の対象・所帰）

三、お念仏をとなえて人生を送る（信仰の実践・去行）

この三つが大事であり、常にたゆまなく過ごしていくことです。そこには、阿弥陀仏の本願（私たちすべてを一人残さずお救いくださり、お浄土に往生させてくださる、という誓い）を信じ、「南無阿弥陀仏」ととなえて、この世で守られ、育てられ、「死」を迎え、息を引き取る時には極楽世界に阿弥陀如来自ら迎えに来られ救い取ってくださるのです。

私たちは色々な「縁」によって、いかなる死に様になろうと、平生や最後の信ある一念で阿弥陀如来の救いに預かれると教示されています。私たち凡夫は厳しい、辛い修行など到底出来る者ではありません。でも、阿弥陀如来の本願を信じ、「どこでも、いつでも、誰にで

も」できる行（称名念仏）を一形（生涯の意）に行うことを勧めてくださったのです。阿弥陀如来が必ずや自ら迎えに来てくださると信じることは「安心」であります。仏教では「あんじん」といいますが、安心とは、「仏願（阿弥陀如来の本願）の中に安置する心」をいうのです。故に安定ができ、安楽になれるのです。この「心」とは私の心であり、この私の心を仏願の中に安置するのです。

例えば、飛行機に乗って旅行や仕事などにお出かけになったご経験を多くの方々がお持ちのことと思います。飛行機に乗って向かう目的地がハッキリしているからこそ、安心して乗っていただけるわけではありませんか。もし、飛び立ってから、この飛行機はどこに行くのか、行けるのかわかりませんと機内アナウンスがあったとしたらどうでしょうか。飲んでいた飲み物も喉を通らないでしょうし、友人たちとの会話も途絶えてしまうのではないのでしょうか。このような飛行機には、とてもとても、怖くて乗ることはできません。そんなこと「あたりまえ」だといわれるでしょう。

しかし、自分の人生を考えた時、自分の人生の到達地、目的地を決めておられますか。きちんと、はっきりと決めた上で日暮しをしておりますでしょうか。「私」の「いのち」の行き場所を考えているでしょうか。「あたりまえ」にある「いのち」は「あたりまえ」にある

のではなく、とてもとても素晴らしい貴重な存在なのです。法然上人は、死は終わりではなく、新たな「いのち」の始まりであり、「いのち」とは目に見える肉体上の命ではなく、過去から未来に流れる大きな「いのち」であると教示されています。

浄土宗では、阿弥陀如来を、

一、本願成就身

二、光明攝取身

三、来迎引接身

として信仰しております。

知り合い（お檀家）の息子さんで医師になられた方がおられます。彼は医学部を優秀な成績で卒業し、国家試験を受け医師免許を取られて医師になられたのですが、優秀であったため教授から大学に残って欲しいと言われたそうです。しかし、彼は大学に残らず無医村地区の診療所に赴任したのです。給与も都会の大病院などから比べればとても低いものです。大学に残れば、将来、教授への道が開かれたかもしれません。

彼のお父さんの十七回忌の法要の後、お話をすることができました。彼が高校二年生の時にお父さんは亡くなられたそうです。家は農家で両親が農家を営みながら育ててくれたそうです。五歳年上のお姉さんは彼が高校二年の春に嫁いだそうです。お父さんはお姉さんを春にお嫁に出し、秋の収穫が終わった後に亡くなられたとのことでした。「父はお姉さんをお嫁に出し、私を育てるために無理をしていたのではないか、近くに医者がいなかったため、病院に行くとも一日を潰してしまうので、具合が悪くても我慢していたのではないか」と話されました。父のような人を出してはいけない、救うことのできる命を救いたいと、その思いから医師を目指したそうです。裕福ではないので、公立高校に進み、国立大学の医学部に現役合格し奨学金をいただきながら大学に通い、卒業して医師になられたそうです。お父さんは信心深く神仏を大事にされ、お仏壇へのお参りを毎日なさっていたので、「南無阿弥陀仏」とお念仏している姿をお姉さんと共に見て育ったそうです。両親が毎朝揃ってお仏壇にお供えをし、手を合わせて深々と頭を下げ、お念仏をとなえて一日が始まったのだそうです。彼とお姉さんは「その光景がとても好きでした」とおっしゃっていました。

お父さんから、

「人間は偉くならなくとも一個の正直な人間となつて信用できるものになれば、それでけ

っこうだ。真っ黒になって黙々として一日働き、時期が来れば『さよなら』で消えていく。
このような人を偉い人と自分は思っている」

と聞かされたそうです。この言葉は後に、鈴木大拙博士の言葉だと知ったそうですが、父の言葉として脳裏に焼き付いているとのことでした。医師を必要としている方々がおられる所で医療に携わることが父の教えではないかと強く思ったそうです。今はお姉さんが義兄とともに家に戻られ、勤めをしながら兼業農家をし、母と共に暮らし、孫も二人おり一家五人で暮らしているそうです。彼も近々結婚するとのことでした。

彼にはお父さんの教えが生きています。お父さんの生を全うした姿は、息子さんの生き方、「いのち」の尊さ、永続性を示していると思います。彼は亡きお父さんと呼応しているのです。彼は朝起きると阿弥陀如来と亡きお父さんに手を合わせ祈ってから一日が始まるのだそうです。父と母が毎朝していたことを彼も自然としているのです。阿弥陀如来と亡きお父さんと常に心の会話を毎朝し続けておられるのです。

法然上人のご法語にも、

善導の、三縁の中の親縁を釈し給うに、

「衆生仏を礼すれば、仏これを見給う。衆生仏を称うれば、仏これを聞き給う。衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じ給う。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業と、かれこれ一つになりて、仏も衆生と親子のごとくなる故に親縁と名づく」

（『御法語 前篇』第二十七）

【現代語訳】

善導大師の三縁の中の親縁を解釈しておられますに、「衆生が仏さまを礼拝すれば、仏さまも礼拝する衆生を見てくださる。衆生が仏さまの御名をとなえれば、仏さまはこれを聞いてくださる。衆生が仏さまを念ずれば、仏さまも衆生を念じくださる。だからこそ、阿弥陀仏と行者の、身と口と意での行いが、一つになって、仏さまも衆生と親子のごとくなるので親縁と名づけるのです」

とあります。私たちの思い、行動は阿弥陀如来と私たちを産み育ててくれた親に繋がっているのです。母親が赤子の泣き声で、赤子がお乳が欲しいのか、オムツを替えて欲しいのか察知していますが、それは互いに呼応しているからこそ出来るのです。私たちと阿弥陀如来は

共に親子のごとく呼応しているのです。阿弥陀如来は匂いも形ありませんが、親のない人は誰一人としていないように、阿弥陀如来はおられるのです。

私たちと阿弥陀如来の関係は母と子、父と子との関係でなくてはなりません。それ以外になんと言えましょう。阿弥陀如来が存在するのかという疑問すら存在しない、疑いの知らない信じ方で阿弥陀如来に帰依することです。

一には決定して、深く自身は現にこれ罪悪生死の凡夫の、曠劫より已来常このかたに没し、常に流転して、出離の縁有ること無しと信ず。

（『選択集』八〇『聖典』三・一四〇頁）

【現代語訳】

一つには自身（今あるわが身）は現に罪悪生死の凡夫であり、計り知れないほどの長い、長い間、常に六道に死んでは生まれ、死んでは生まれを繰り返し流転して、そこを離れる縁を頂くことができない者であることを深く信ずる。

と法然上人は、「念仏」とは自分が阿弥陀如来の御前において、全ての人間は凡夫であり愚者であるという自覚に立つところから発するものだと言っておられます。

「罪惡生死、煩惱具足の凡夫」の自覚、人間觀を根底とするが故に、阿弥陀如来に帰依し「念仏」をとなえるのだと教示されたのです。深く自らの至らなさに気づいた時、初めて仏の教えが素直に受け取ることが出来るのです。

凡そ聖道門は智慧を極めて生死を離れ、浄土門は愚痴に還つて極樂に生る。所以は、聖道門に趣くの時、智慧を瑩みかき禁戒を守り、心性を淨きよむるを以て宗むねとなす。然るを浄土門に入るの日、智慧をも憑たのまず、戒行をも護らず、心器をも調ととのえず、只々甲斐無く無智者と成り、本願を憑みて往生を願うなり。

〔三心料簡および御法語〕 Ⅱ 『昭法全』 四五一頁

【現代語訳】

およそ聖道門は智慧(さとり)を求めて六道を離れ、浄土門は自身は愚痴の身であるとの自覚を持って極樂に往生させていただく。故に、聖道門に趣く時は、智慧を擁して

禁戒を守り、心と身体を清浄にすることを教えの根幹となす。けれども浄土門に入る時は、智慧をもいらず、戒行をも護らず、自分自身の機根にもとらわれず、値打ちがないほどの無智者であるけれどただただ阿弥陀仏の本願にすがって往生を願うのです。

その故は念仏の行はもとより有智無智を簡えらばず、弥陀の昔誓いたまいし本願は遍く一切のためなり。無智のためには念仏を願とし、有智のためには余業を願としたまう事なし。十方世界の衆生のためなり。有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴きも賤しきをも、男も女も隔てず、もしは仏在世の衆生、もしは仏の滅後の衆生、もしは釈迦の末法万年の後三宝みな失せて後の衆生まで、ただ念仏ばかりこそ現当の祈禱とはなりそうらわめ。

〔鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事〕 Ⅱ 『聖典』四・三七一―三七二頁〕

【現代語訳】

その訳は、念仏の行はもとより智慧の有る無しを選ばず、阿弥陀仏がまだ法蔵菩薩であつた時に誓われた本願は遍く一切の人々のためです。無智の人々のためには念仏を

願とし、有智の人々のためには余行（念仏行以外）を願としたものではありません。十方世界の衆生のためなのです。有智無智、善人悪人、持戒破戒、身分の高い低い、男も女も隔てず、また、仏さま在世の衆生、仏さまがいらっしゃらない世の衆生、もしはお釈迦さまが亡くなられた後の末法万年の後、三宝（仏、法、僧）がみななくなってしまう後の衆生、全ての衆生にとってただ念仏だけがよりよい来世と今生のための祈禱となるでしょう。

とあります。

浄土門の教えは「智慧をも憑たのまず、戒行を護らず、心器をも整えず」に阿弥陀如来の本願を憑んで往生を願う」教えであります。それは愚者・劣機を基準として凡夫をとらえ、凡夫に対して温かい眼差しで包容しておられるのです。阿弥陀如来の救済は勝れた者ではなく、むしろ弱者・挫折者・失敗者を対象としていると言っても過言ではありません。同時に念仏行は、有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴賤、男女、時期等を区別しないのですから本当にありがたいことなのです。

だからこそ阿弥陀如来を心から信じ親のごとく思い、念仏をとなえていただき日暮らしを

していただきたいと強く思います。

- 一、信仰の目的＝極楽往生
- 二、信仰の対象＝阿弥陀如来への帰依
- 三、信仰の実践＝念仏

この三つがとても大事であり、

- 一、阿弥陀如来の御前において、全ての人間は凡夫であるという自覚、罪惡生死・煩惱具足の凡夫であるという自覚が基本であること。
- 二、劣機を基準として凡夫をとらえ、凡夫に対して温かい眼差しで私たちを包容してくださること。

- 三、念仏行は、有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴賤、男女、時期等を区別なさらない。
- 四、阿弥陀如来の本願（第十八念仏往生の願）によって平等往生が確立していること。
- 五、愚鈍の身と自覚して「ただ一向に念仏」する時、阿弥陀如来とのつながりの中にい

ることを自覚することができ、幸せへの道となることだと強く思うことができる。

以上五点に集約できるのです。

春の花 秋の紅葉の いろいろも

世にいつわらぬ ためしなりけり

誠に妙を得たお歌です。

法然上人がお示しになった教えは、「この人生をいかに生き、全うするか」の指標になつていくものと信じます。

極楽に往生するために、阿弥陀如来を信じ、念仏をとなえて、現の人生を充実したものに人生を全うする、生きることが幸せだと言えるのではないかと思います。

そこには、「家庭にみ仏の光」があり、「共生（ともいき）」があるのでないでしょうか。どうぞ、一遍でも多くお念仏をとなえて暮らす日々をお送りいただければ幸いです。

一すじの 南無阿弥陀仏の 味わいは
つとめてみねば 知れぬなりけり（徳本）

本日は誠にありがとうございました。

如来大慈悲 哀愍護念（同称十念）

三、今ある、ありがたさ

伊勢教区香肌組 蓮浄寺
堤 康雄

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人のたまわご法語に曰く、

「露の身はここかしこにて消えぬとも 心は同じはなのうてなぞ」と。(十念)

『和語灯録』五 Ⅱ 『聖典』四、四八八頁

皆さん、ようこそお参りいただきました。暑い夏も過ぎ、実りの秋を迎える季節となつてまいりました。稲穂もたわわに頭を垂れ、いよいよ収穫の時を迎えます。一粒の種から多くの実りをいただく。ありがたいことです。夏が過ぎ、秋を迎えると穂が伸び始め、穂が花をつけ、実が膨らんでまいります。田んぼからは稲穂の馥郁ふくいくとした香りが漂い、いよいよ収穫の時を迎え、一粒の籾からたくさんのお米が収穫出来ます。けれども夏の暑さであったり、干ばつで水がなかったり、太陽の光が足らなかったり、草に栄養をとられ思うように育たなかったり、台風によって倒されたり色々な出来事が起こってきます。

我々の信仰もまた同じではないかと思えます。ひと粒の種籾が育つように、信仰の種を人生の中で育てていく。人生には色々な事があり、一筋縄ではまいりません。けれども必ず花開き、実をつける稲穂のように、私たちも信仰ある人生を花開かせたいものです。

先ほど讃題にお詠みいたしました「露の身はここかしこにて消えぬとも 心は同じはなのうてなぞ」、このお歌は法然上人がお詠みになったものでございます。「露の身」とは、はかない人生、老少不定ろうしやうふじやうというように、いつ何時、人生は終わるかわかりません。「黒谷和讃」にも、

つゆよりもろき身を持ちて何故に後生を願わぬか

とあります。今生の別れではあれど、後の句にあるように阿弥陀さまの蓮の台、極楽浄土に往生する同じ思いであるなら、再び浄土での再会があります。

このお歌は法然上人が七十五歳の時にお詠みになられたお歌でございます。七十五歳でお詠みになられたお歌……、意味するところを考えるとどなたかに別れを告げるようにも聞こえます。この世では会えずとも浄土での再会があるからと慰めのようにも聞こえるお歌でございます。尋常ではない様子が受け取れるようなお歌でもあります。法然上人はこの年、ご流罪となられたのです。そのいきさつを少しお話ししましょう。

法然上人は四十三歳の時、何人も救われる念仏宗を立教開宗された後、京都市中で念仏を広めてくれました。何人も救われる教え、それはともすれば天台宗、南都六宗、興福寺の当時の仏教勢力にとっては許しがたい教えでした。厳しい修行をせねば、あるいは堂塔伽藍を寄進せねば救われないとされていた当時のこと、念仏門が広がりを見せてくると、「仏をないがしろにしている」等々、批判の矛先が法然上人に向けられてまいります。念仏を停止

せよと当時の仏教勢力の攻撃が激しくなっていました。法然上人はその都度、弁明や申し開きを比叡山の座主に行つて事なきを得たそうです。ただ、法然上人の教えを曲解して誤解を受けるようなこともあったようです。

事態は風雲急を告げます。興福寺から念仏門が一門に偏執し他宗を軽んずる点を非難し、念仏の停止と法然上人と弟子の処罰を求めた奏上が朝廷に出されました。その中、毘にはめられたかのように、事件が起こります。京都鹿ヶ谷しかたにの念仏道場で住蓮・安樂が別時念仏、六時礼讃を行つてたくさんの信者を集めていたその中に、後鳥羽上皇の女官（女房）が含まれており、二人の女官が感激のあまり出家したのです。ちょうどその折、熊野詣ぎようこうで行幸されていたこともあり還幸かんこうの後**に**そのことを知ることとなりました。「悪あし様にざんし申す人や有りけん」とあるように、後鳥羽院の寵愛を受けていた女官を勝手に出家させたと追究を受けることとなります。申し開きは通じず、逆鱗に触れた住蓮・安樂他二人が死罪となりました。親鸞聖人は越前へと流されることとなります。同時に法然上人は土佐国とさのくにに遠流されることとなりました。親僧侶の允許いんきよを剥奪され還俗させられて藤井元彦と名前を変えることとなりました。

土佐国へと流されることとなった法然上人を弟子達はなんとか引き留めようと「この際お

念仏はやめると朝廷に申し出ください。そうすればご流罪は免れます。お念仏は陰でおとなえすればよろしいではないですか」と進言します。この言葉に法然上人は「私は京都市中で念仏の布教はしてきたが土佐国では広めたことはなかった。流罪の身ではあるが土佐国で念仏を広めることが出来る。こんなありがたいことはない。朝恩とうけとらせていただきます」。

大変な目に遭っているにもかかわらず朝恩と言い切る法然上人、今でいえばプラス思考そのものであります。いよいよ法然上人は土佐国へと流されていきます。とはいえ九条兼実公の計らいにより高松生福寺にとどまりました。実は土佐には身替わりが行ったという話もあります。土佐国四万十しまんとに同じ名前の生福寺（一八七一年に廃寺）があったそうです。そこに来られるはずであった法然上人が身替わりであったため、村の人は大変残念がったそうです。そこで法然上人が使われていた鉦鉦と袈裟が送られたそうです。ただ遠流の場合、途中まで後は身替わりということも多かったようですが。

京の法性寺を出発した法然上人一行は下鳥羽を出航し淀川、室津、讃岐へと流されていくこととなりました。別れの折、九条兼実公よりお歌が送られます。

ふりすてて 行くは別れの はしなれど ふみわたすべきことをしぞ思う

「この私をお見捨てになられ、長い旅にお出ましになられるのは、今生の別れとなるはじめなのでしょうか。何としてもお便りだけはして、御赦免の橋渡しをしたいと思います」
この歌に返された歌が、讀題でお詠みした法然上人の返歌でございます。

露の身はここかしこにて消えぬとも 心は同じはなのうてなぞ

「なごりは尽きませんが遅れ先立つのはこの世の習い。草場の露のようにはいかない私たちの命です。お互いの身がどこで果てようとも、共に極楽浄土の蓮の台でお会いしようという思いに変わりありません」と兼実公の思いを察してお詠みになりました。出立直後に兼実公はひと月経たずして亡くられます。御年五十八歳でありました。老いて尚、苦難の道を歩かれた法然上人、この後、摂津の勝尾寺かつおうじに四年を超える月日を過ごし、往生される二ヶ月前に吉水の里に戻ってこられることとなるわけですが。度重なる弾圧にも屈せず念仏信仰を貫き通した法然上人。その時代から八百年、様々な苦難の道を経て今があります。

時は下って明治の時代、維新とはいうものの、仏教にとっては大変な時代となりました。

明治元年には神仏判然令しんぶつはんぜんれいが出され、事実上、廃仏毀釈の時代に突入しました。江戸幕府の庇護と僧侶の墮落を指摘される部分もありますが。しかし廃仏毀釈のことは歴史ではあまり触れられない部分です。歴史とはそういうものとはいわれますが。教科書には興福寺の五重塔が薪として売りに出されたと記されてあったり、壊された仏像の写真が掲載されていたりということはありませんが、記事としてはあまり多くないようです。しかしある説によれば当時の日本国内寺院の仏像什物の約三分の一が壊され、約三分の一が海外に流出し、残りの約三分の一が現在あるものともいわれています。それほど凄まじいものでした。私ども伊勢の地も多大な影響を受けた地域です。伊勢の河崎に大泉寺という浄土宗のお寺がありました。その物語を少しお話ししたいと思います。

大泉寺の小僧が言うには「お師匠さま、伊勢の地に天皇さまが来られるそうです。それに寺を壊せとお達しが出るそうです」と。

大泉寺の当時の住職（吉水禪住師）、「それは私も聞いておる。国の命を受けて度会府わたらいふ（現

在の三重県の一部を治めていた役所）より達し書が出ておる。天皇さまが伊勢神宮に行幸されることとなった。その道中のお寺、仏閣は取り払えということじゃ。そして仏具など仏に關する物は商いしてはいけないと命令が下つたのじゃ」。小僧は「お師匠さま、宮川堤に立て札があり、何か書かれております」。師匠（吉水師）は「その立て札には、僧侶は引鑿などを持って念仏して歩くことはまかり成らぬと書いてあるのじゃ」。

その当時の伊勢の町は仏教色を一掃する方向に動いておりました。地藏などの仏教語や寺院の名称が町名になっている町の名は次々に変更されていったそうです。いよいよ、その嵐が寺院にも及びます。

「大泉寺の住職はおるか!」。政府の役人が玄關に慇懃無礼な言い方で入ってまいります。「その方は未だ廃寺出願を出しておらぬ。いかがいたすおつもりか。今出せば還俗を許すこととなるぞ。廃寺出願をすれば、堂宇、什物等一切を貴方に贈与する。いい話ではないか」と迫ってまいります。吉水師は大変困惑し、返事を洪っていると役人は「すでに御一新（明治維新）の御政体に感激して還俗し市中において読み書きそろばんとこどもの教育にたずさわっておる。ほうびとして金三百疋を下されたそうじゃ」。何度もやって来て迫る官吏の言葉にとうとう屈して、大泉寺住職吉水師は廃寺届けを出すこととなりました。当時の僧侶は

維新の何たるかを知らない傾向にあったようです。知恩院末廃寺帰俗出願は三十五ヶ寺、浄土系は七十九ヶ寺にも及び、その中に大泉寺も含まれています。

吉水師は世話人そして法類寺院を集め廃寺となった大泉寺の処分について話し合いました。吉水師は「こたびの御一新によって大泉寺廃寺並びに住職還俗の運びとなった。本堂は山田越前屋の仲介により売却先が決まった。お堂も建設されて間がない故、五百三十九両の売価で売ることとなった。これが件の証文くだんである。私も還俗の身、大泉一郎の名で証文に捺印した。嘆かわしいことであるが致し方あるまい」。

売却された証文が三河の行福寺に残っており、証文には元大泉寺、大泉一郎世話人から本堂等が五百両あまりで譲られたことがわかります。川崎の大川寺の本堂は間口九間奥行き六間、瓦、須弥壇一式が明治五年から八年にかけて伊勢湾を渡り矢作川を遡り三河の行福寺へと渡っていききました。証文に「大泉一郎」とあり、吉水師がこの名を仮にも名乗った、悲しい事実があります。

話し合いの結果、吉水師、ここでは大泉一郎かもしれませんが仏像什物等を持って大泉寺を出ることになりました。法縁を頼り松阪御糸の浄徳寺に身を寄せることとなり、がらんとした大泉寺に深々と頭を下げると目から涙がしたり落ちました。この地を後にする

悲しき、苦しきをかみしめながら、いよいよ出発の時。亡くなって五年となる先師を思い浮かべながら「師匠さま、誠に申し訳ないことです。私の力が及ばぬゆえこの地を後にせねばなりません。念仏門として恥ずべきことではございますが、御一新の流れに棹することは出来ません。お許しください」。どこをどうやって来たかわからぬほど無力感が心を覆っていました。やがて宮川を越えた地にある浄徳寺に着き、荷をほどき仏像什物を運び入れました。それ程大きくないお堂に仏像什物があふれます。当時、仏像仏具は道に並べられ二束三文で売られたともいわれています。松阪で売られていた仏像を不憫に思い、まとめて買い三河方面に運んだという記録も残っています。

時を経て、明治六年、御一新後、不穏な空気はそこかしこに流れていました。香肌の蓮浄寺は先師が遷化し、後に残された弟子二人、青雲の志を持って宗門の礎となるはずが、新国家建設の雰囲気の中で大激論、果ては一人は軍人に、もう一人は出奔、寺はもぬけの殻となりました。時代であろうか、たちまちのうちに神官が現れ神葬祭しんそうさいを進めていきます。檀信徒がことごとく離檀し、寺は破却される寸前、阿弥陀如来、観音像等は地元の門徒衆が預かることとなり、本堂庫裏観音堂はがらんどとなり果てました。そして破壊が始まります。観音堂は壊され薪となってしまいました。しかし、本堂庫裏はなぜか残されました。壊すに忍

びなかったか、大きくて壊せなかったのかは不明です。元紀州藩の家臣が神主となりこの地に来て神葬祭を推し進めていきました。が、そこに割って入ったのが伊勢教区元布令頭ふれがしらの樹敬寺住職、香肌組の僧侶。元布令頭は「伊勢山田の地では新領域、天皇さまの行幸もあり、多くの寺々が廃寺となった。まだまだ落ち着いてはおらぬ。我ら浄土の寺も残りわずか、だが再建に奔走されておられるようだ。ところで香肌組蓮浄寺で大変な騒動が起こっており、後代が決まらぬのを良いことに、その隙を狙い神官が入って神葬祭を行っていると聞く。ゆゆしき事態であるがいかがいそう」。香肌組の組長は「かかる事態を蓮浄寺檀信徒から聞き及び、復旧せねばと相談にまいった次第、是非とも蓮浄寺に僧侶を招請し、再建を果たしたい。幸い寺では神葬祭は行っており、民家を借り行っている模様、仏さまは門徒衆で預かってもらっている様子にございます」。元布令頭は「それでは僧侶を招請し帰檀を促せば再建の道もあるう。聞き及ぶところ、伊勢山田は川崎に今や廃寺となった大泉寺、その寺の住持が還俗して松阪魚見の浄徳寺に閑居しておると聞く。そのものに蓮浄寺をまかせられてどうか。廃寺還俗されたことで、仏像仏具を持つておると聞く。還俗はされておるが、元々念仏門の身の上、きつとこの寺の再建に力をかしてくださるはずじゃ」。

元布令頭と香肌組組長は吉水師が閑居する浄徳寺へと訪ねました。元布令頭が「伝え聞く

ところに依れば吉水上人は、元大泉寺の住職。御一新の混乱により彼の地を追われ、この浄徳寺に閑居されておる。そうであるな。大泉（吉水師）一郎は「相違ござらぬ。誠に申し訳ないことであるが、念仏弘通の中心である寺院を廃寺となしてしまい、この上はこの地において閑居し余生を送ろうと思っております」。元布令頭は「実は今日ここにまいったのは他でもない、同じような境遇にある寺院の再建に一肌脱いではくれぬかと、お願いに上がった次第」。大泉一郎は「と申しますと」と、耳を傾けます。

元布令頭は「この浄徳寺より西に八里ほど伊勢本街道の道沿いに香肌組の蓮浄寺という寺がある。蓮浄寺がそなたと同じ廃寺の憂き目にあつておる。観音堂は薪と化し、寺はがらんどう、幸いにして阿弥陀仏は門徒衆に護られておる。檀徒はなんとか寺の再建を期しておる。なんとか再建に手を貸しては下さらぬか」。大泉一郎は「先師の方々には誠に申し訳なきお言葉、私は廃寺を届け還俗となつた身、大泉一郎にございます。僧を捨て還俗し今や俗の身の上なればとてもとてもお受けできぬこと。過分のお頼みにございます。しかれども念仏の教え捨てがたく、還俗の身なれども浄土の義、忘れてはおりませぬ。むしろお許しをいただければ再び僧侶となり、蓮浄寺再興に微力ながら助けとさせて頂きたい」。元布令頭は「お受け頂けるか。ありがたいお言葉。その決意痛み入るところでございます。頼みましたぞ。

ついては思い立ったが吉日。早速、蓮浄寺にご足労お願いしたい。」

元布令頭、香肌組寺院は帰檀を切望する者に伝え蓮浄寺再建に奔走することとなり、僧侶に戻った吉水師は帰檀者と共に再建を果たします。檀信徒もだんだん戻りはじめ、寺の体をなしたところで、香肌組寺院と共に何度も五重相伝を執り行ったとのこと。再建をなし終え、明治十六年に往生されておられます。先師の努力がなければ、再建されず田畑となっていたかもしれません。なにより、念仏信仰の火が消されなかったのです。

法然上人の時代、明治維新の時代、念仏に対しての世の中の重圧、困難な時代を乗り越えて今があります。意に反して還俗を強いられた時代、明治の世にあった還俗は復正と呼ばれておりました。つまりは仏教の信仰を捨てることが正しいことであると廃仏毀釈の雰囲気の中で使われたようです。法然上人が法難を乗り越えながら念仏信仰の火を消されなかったように、明治の世の嵐をかいぐぐって念仏信仰を護ったのであります。それは阿弥陀さまによって救われていくことを信じて、たとえ還俗させられても、念仏の信仰を捨てなかった事実であります。

「心は同じ花のうてなぞ」とたとえこの世で会えずとも、浄土での再会を期する、阿弥陀

さまを信じ南無阿弥陀仏となうればこの身このまま救われていく信仰の正しさを教えてく
れているようです。苦難の道を乗り越え八百年。尊き教えに出会った喜びを感じ、共にお念
仏をおとなえいたしましょう。（同称十念）

四、阿弥陀如来の本願と法然上人の浄土開宗

岡山教区美作組 浄土院

漆間 宣隆

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、
のたまわ

「我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり」と。

(十念)

(『法然上人行状絵図』六〇『聖典』六・六五頁)

皆さま、本日はようこそ御当山の法要に御参詣くださいました。私は浄土宗祖法然上人の御生誕の地、岡山県中央部の久米郡久米南町（なんちよう）にあります、誕生寺というお寺の一面の浄土院というささやかな寺より参りました。

来る二〇二四年は、承安五年（一一七五）春、法然上人が浄土宗を開かれて八百五十年に当たる記念すべき年であります。

ただいま拝読いたしましたお言葉は、法然上人が浄土宗を開かれた旨を述べたもので、法然上人は人々に「たとえ煩惱を断ち切ることの出来ない愚かな凡夫であっても、阿弥陀仏の極楽浄土に往生したいと願って、ひたすら南無阿弥陀仏と念仏をとなえれば、命終えた後、阿弥陀仏の本願力によって一人も漏れることなく極楽浄土に往生することが出来ます」と説かれ、往生浄土の行として称名念仏の一行をお勧めにされました。

法然上人が新たに浄土宗を開かれた時、他宗派の人々が、「法然上人は、釈尊が説かれた数多くの教えの中で、どうしてただひたすら念仏だけをとなえる専修念仏の教えにこだわるのか。それこそ偏った教えではないのか」と批判しました。この批判に対して上人は、「私が浄土宗を立てたのは、お釈迦さまがこの世において人々にぜひとも伝え遺しておきたいとの思いで示されたすべての愚かな凡夫を極楽浄土に救いとりたいという阿弥陀仏の尊い願い

と、その実現のために私たちにご用意くださった称名念仏の行を私たちが実践することによって、はじめて凡夫がその身そのまま阿弥陀仏の妙なる浄土に往生するという事実が明らかになるのです。もし私が今、浄土宗を開き、新たな教えを立てなかつたら、どうして凡夫が阿弥陀仏の浄土に往生するという道理を明らかにすることができましようか。あえて私は、浄土宗を立てたのであります」と他宗の人々にお答えになっています。

さて、浄土宗を開かれた法然上人の教えの特色は、私たちは、人間の性である煩惱さかによって様々な悩み苦しみから免れることのできない「凡夫」であるという、人間共通の事実を明らかにされ、そのような「凡夫」が例外なく一切の苦しみから解放された「仏」となる方法を発見されたことでもあります。

法然上人の、私たちはすべて、罪惡生死の凡夫であるという強烈な自覺は、単なる思案や学問上の検討から生まれたものではなく、ご自身の仏道修行の実践の中で確認された人間の事実にほかなりません。

法然上人が幼き九歳の時、美作みまさかのくにいなおかのしょう国稻岡庄の治安維持を担当する押領使おうりようしのお父さまが都から新たに赴任してきた貴族の莊園を管理する預所の役人との間で争いとなり、恨みを抱いた敵の夜襲によってお父さまは重傷を負い、息を引き取る間際に、九歳の我が子に対して驚

くべき遺言を残されました。「私はお前との別れに際し、これだけは申しておく。お前は武士の子として敵を討ちたいであろう。しかし決して敵を恨んではならぬ。これは前世からの因縁である。お前が敵を討てば、いつの世までも互いに恨みを残し争いはなくならない。お前は僧となって、私の菩提を弔い、安らかな境地で生きてほしい」。そう言い遺し、四十三歳で往生を遂げられました。九歳の少年の眼に焼きついた父の死の姿、死に臨むときの最期の言葉が幼き日の法然上人の心に響き、父の遺言を成し遂げるために行動に移されたのであります。

後に法然上人は「父の遺言忘れ難くして」と回想されています。

父の死後、母とも別れ、やがて十五歳（十三歳とも）で比叡山に登り、真剣に学問修行に励みましたが、修行が進むにつれ深い悩み苦しみに襲われました。父の遺言を守り、自他平等に救われる道を求めているものの、父を殺した敵への憎しみをはじめ、多くの煩惱に振り回されてしまう。修行を重ねても心の自由を得られない苦しみの中、十二年の歳月が流れました。そして二十四歳の時、比叡山を下り、京都の嵯峨・清凉寺の釈迦堂で自身の救いを求めて七日間の参籠を行いました。この釈迦堂には釈迦が生きていた時のお姿を刻んだ「三国伝来しやうじんの生身の釈迦如来像」が祀られており、広く人々の信仰を集めていました。

この釈迦堂に参籠中、法然上人が目にしたのは、老若男女、貴賤に関わりなく多くの人が、ひたすら釈迦像に詣でて真剣に救いを求めて祈る姿でした。

この頃の日本は、社会の大きな変動期で政治的混乱に陥り、多くの一般庶民が戦乱に巻き込まれ家を失い、財産を失い、最愛の家族との悲しい別れ、そしてその日を生きていくために心ならずも罪を犯し、来世には、その報いで地獄に堕ちて永遠に苦しまねばならないという不安と絶望の中で人々は暮らしていました。しかし、政治の世界も仏教界も権力闘争に明け暮れ、人々に救いの手が差し伸べられることはありませんでした。法然上人は、仏の慈悲に救いを求めて釈迦如来像に真剣に祈る人々の姿を見て、お釈迦さまの教えの中にすべての人々が救われる教えが必ずあるはずだと、京都や奈良の寺々の、当時の有名な学僧に教えを請いました。しかし煩惱を消し、生死の迷いから離れる教えに会うこともなく、「悲しいことだ、悲しいことだ。どうすればよいのか。この私の心に相応する教えはどこにあるのか、私の身体に堪えうる修行はあるのだろうか」と深い悲しみと絶望の中、比叡山に戻った法然上人は「報恩蔵」と呼ばれる経蔵に籠って以後、二十余年近くにわたって經典を含めたあらゆる書物（一切経六千余卷）を五度まで読み返し万人が救われる教えを求め続けました。やがて法然上人は、恵心院の源信僧都の著した『往生要集』によって、口に仏の名をとなえる

という称名念仏の行に惹かれるようになります。そして遂に承安五年（一一七五）の春、これまで何度か読んだことのあった、法然上人から遡ること五百年前の中国・唐の時代に活躍された大聖者である、善導大師が著された『観経疏』の一節に大きく心を揺さぶられました。そこには、「一心に専ら阿弥陀仏の名号を念じ、立ち居起き伏し全ての時に、お釈迦さまのご在世当時から時間の隔たりの長短を問題にせず、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とおとなえたならば、これこそ阿弥陀仏の願いに通ずる一番正しい振る舞いである。なぜならば、阿弥陀仏の本願に順ずるからである」と説かれていました。『無量寿経』によると、阿弥陀仏の四十八願の中の第十八番目に「私の名を呼ぶ全ての人を、極楽浄土に救いとる」。このように誓われて阿弥陀仏になられたのであるから、南無阿弥陀仏と名を呼べば、全ての人が救われる。老人も子どもも、男性も女性も、学問のある人もない人も、一切の人を救いの対象にしている。『観経疏』の「一心に専ら弥陀の名号を…」の一節を目にされた瞬間、法然上人は「これだ、これを描いて万人救済の道はない。阿弥陀仏は予て私たちのために救いの道をご用意してくださっていた。今こそ私は阿弥陀仏によって救われた」という、大きな喜びと感動の中、滂沱^{ぼうた}として涙を流して感激されました。御伝記には「落涙千行なりき」とあります（『聖覚法印に示されける御詞』其二『昭法全』七三三頁）。時に承安五年の春、法然

上人四十三歳の時でありました。

これまで日本仏教の各宗派において称名念仏の行は、誰にでも出来る行であるため、高尙な修行とはみなされていませんでした。しかし法然上人は、その考えが誤っていて、凡夫の極楽往生こそ阿弥陀仏の万人救済の本願であり、極楽往生は自らの力で果たすものではなく、阿弥陀仏のお力（他力）によって叶うもので、いかなる凡夫であっても、ただひたすら「南無阿弥陀仏」ととなえれば、往生が叶えられる。それが阿弥陀仏の本願であるならば、称名念仏は阿弥陀仏の思いにかなった尊い行であり、直ちに専修念仏に帰し、阿弥陀仏の本願力によってのみ私たち凡夫が阿弥陀仏の報土である極楽浄土に往生することが出来る、ということを示すために浄土宗を開かれたのです。

私は、今から三十一年前、浄土院の住職となる晋山式を控えた昭和六十二年の六月、大学時代からの友人で、現在同じ布教の道を歩む島根県のY師の提案で、浄土宗第二祖鎮西聖光上人に倣^{なま}ってY師と二人で四十八日間の別時念仏を修することにしました。浄土宗の寺院の僧侶として、檀家の皆さまをはじめ人々に宗祖法然上人が説かれた称名念仏の教えを説くにあたり、一度心ゆくまで念仏をとнаえて何か確かなものを頂戴したいというかねての思いに駆られ、二人で計画をしたのです。そして、師匠であり住職である父と家族に相談しました

ところ、父は、「浄土院の本堂は、新築して日も浅い。お前たちがしっかりお念仏をとなえて、お念仏の声をこの本堂の柱の一本一本や壁に染み込ませてくれるなら使ってもよい」と許可してくれ、母も妻も「毎日精進料理を作って精一杯お手伝いをさせていただく」と理解してくれまして、六月五日から七月二十二日までの四十八日間、別時念仏を行うことにしました。一日の時間割は、毎朝六時からの勤行として二祖鎮西聖光上人の著された『末代念仏授手印』の序文を拝読し、後は二時間の称名念仏の一行だけとして、それから夜九時まで二時間から三時間念仏をとなえては、三十分から一時間の休憩の繰り返しと決めました。入行の三日前頃からY師の全国の信者さんから、私たちの無事満行を願って、四十八日間使用する特大のロウソク、お線香などが届けられ、浄土院の檀家の方々からも新鮮な野菜や果物などが続々と届けられ、二人とも「絶対に失敗は許されない、絶対にやり遂げねば」という固い覚悟と決意のもと、張り切ってお念仏の行に励んだのです。

ところが、入行早々にこれは大変なことになったと後悔しました。覚悟はしていましたが、足は痛いし、声はつぶれる、暑さで流れる汗は目に染みる、そして妄念雑念が石鹼の泡のように次から次へと湧いてまいります。これではいかんと、妄念雑念を振り払うべく大きな声を出してお念仏をとなえるのですが、それでも次から次へと湧いてくるのです。「このよう

な苦しい行を四十八日間も続けられるだろうか。このまま止めてしまおうか、もし失敗したらどうしよう」と肉体的にも精神的にも苦しく、早く時間の過ぎるのを待っているという状態でしたが、このような心の状態の時には「もう、一時間位は経つただろう」と手元の時計を見ると五分と経っていないのです。Y師の方を見ますと微動だにせず、一心となえています。「こんなことで浄土宗の僧といえるのか!」と自分を叱るのですが、どうにもなりません。檀家の皆さまの中には、私たちを励ますかのように一緒に木魚を打って何時間も共にとなえてくださる方もいるのです。

行を始めて二十日位経ったでしょうか、「私は浄土宗の僧として失格ではなからうか、念仏をとんでも少しも心が楽にならない、もう駄目だ」と挫折しそうになった時、私に温かいお言葉をかけて適切なご指示を与えてくださったのは、法然上人のお言葉でした。

ただし無明を断ぜざらん者は妄念起るべし。世間の客と主とのごとし。まろうどあるじ念珠を手に取り、時は妄念のかずを取らんとは約束せず、念仏の数とらんとて念仏の主を据えつる上は、念仏は主、妄念は客なり。さればとて心の妄念を許されたるは過分の恩なり。

（「東大寺十問答」Ⅱ『聖典』四・五二九頁）

というお言葉です。いくら念珠を手にとっても煩惱、妄念はなくなりません。むしろ妄念雜念が次々と起こり、念仏をとなえようとする心、阿弥陀仏の本願を頼んで念仏をとなえるという心はどこにあるのか疑わざるを得ない状態なのです。恐らく頭のとっぺんから足の爪先まで九分九厘九毛まで煩惱だらけで、僅かに一毛だけが信心ではなかったかと思えます。しかし、ありがたいことに法然上人は、ご自分の念仏体験を通して、私たちにこの一毛の阿弥陀仏への信心が主人であり、九分九厘九毛の煩惱は客であるから、お客はいつか去っていくなければならないが、主人はいつまでもその場に留まるのであるとの例えをもって教えてくださいました。念珠を手にとることは一毛の道心、信心である。この念珠は煩惱の数を数えるのではなく、念仏の数をとるためのものであり、しかもこの念仏は煩惱をなくした後の念仏ではなく、煩惱の中となえる念仏である。この煩惱の中の念仏の数をとるための念珠である。この煩惱が起こることを許されたのは阿弥陀仏の過分の恩であると、教えてくださいます。

このお言葉に接して、私は「今までとなえていた念仏は自分の力をあてにした自力の念仏であった。だが本当は、煩惱がおこるままに阿弥陀仏にまかせきったままでお念仏をとなえ

ればいいのだ。まず念仏をとなえることだ」と思ったとき、初めて心静かにお念仏をとなえられるようになったと思います。それから、すべて阿弥陀仏の計^{はか}らいに任せて妄念雑念がおこるままに念仏をとなえておりますと、今度は今まで気にも留めていなかった自分自身の醜い面が、これでもか、これでもかと見えてくるのであります。今日まで何気なく過^{すご}してきた自分の生き方、考え方がいかに自分本位で高慢極まりないものであったか、自分の何気ない言動がどんなに人々を傷つけてきたか、そして今日まで犯してきた罪の重さというものを、阿弥陀仏のお慈悲の光明に照らし出されることによって教えられたのであります。思えばこのように愚かな私を、阿弥陀仏は遥か遠い前世から片時も忘れることなく見守っていただくかったのであります。「懺悔しても懺悔しても、なお懺悔し得ざるを如何せん」であります。でも、この度、皆さまのお力添えのもと、このお念仏の行をさせていただくことがなかったならば、私は知らぬ間にますます罪を重ねていたかもしれません。

法然上人に励まされ、心を阿弥陀仏に寄せて「このような私を此度^{こたひ}こそ助け給え南無阿弥陀仏」と念仏を申させていただくことによって、阿弥陀仏の智慧とお慈悲の光明に私の姿、生き方が照らし出され、これまで歩んできた自分の生き方が如何に危険極まりない、地獄・餓鬼・畜生の世界に堕ちても仕方のない生き方であったと愕然とさせられたのであります。

「お前は、まだ我が名前を呼べぬのか。助けてやるぞ。救ってやるぞ。我が名を呼べ」と遙か昔より今日まで一瞬たりとも休みなく私を温かく見守り、育ててくださっている阿弥陀仏が確かにいらっしやることを実感させていただいた、貴重な四十八日間の体験でした。

あれから三十年以上経った現在も、湧き出し続ける煩惱の中で生きている私ですが、「南無阿弥陀仏」ととなえ、懺悔しつつ阿弥陀仏のお慈悲の光に照らされて過ごしております。今こそ私たちは、法然上人が浄土宗をお開きになりあきらかになった、凡夫が阿弥陀仏の極楽浄土へ確実に往生できる、阿弥陀仏の本願の行である称名念仏のみ教えに出会うことが出来たことを喜び、声高らかにお念仏をおとなえし、かけがいのない日々を過ごしましょう。

（同称十念）

平成 31 年度 布教羅針盤

所求・所帰・去行

所帰 —— 阿弥陀仏を信じて 1

平成31年 4 月 1 日 発行

発 行 浄 土 宗

〒 605-0062 京都市東山区林下町 400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒 105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

発 行 人 豊 岡 鏖 尔

編 集 浄 土 宗 教 学 部

編 集 協 力 JP 浄土宗出版

〒 105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4
TEL (03) 3436-3700
FAX (03) 3436-3356

印 刷 (株) 共立社印刷所

表紙デザイン 藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2019 Printed in Japan
<https://jodo.or.jp/>



淨土宗